
魔法少女リリカルなのは～神の気まぐれによる不幸な転生者達～

橘 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜神の気まぐれによる不幸な転生者達〜

【Nコード】

N9878R

【作者名】

橘 潤

【あらすじ】

神の気まぐれによって殺され魔法少女リリカルなのはの世界に転生させられる事になった月影凜、神谷詩織、花咲蒼夜の三人。

理由を聞いたなら、魔法少女リリカルなのはが好きだから。と言った。原作を全く知らない三人。

これからどうなるのか。

プロローグ（前書き）

先に言っておきます。

この物語は不定期更新です。

その場の思いつきで書いてるので矛盾が生じると思います。

その時は教えてください。できる限り修正します。無理な場合は謝らせていただきます。

ちなみに作者は他のアニメをほとんど知りません。

では、本編をどうぞ。

プロローグ

何だ。この展開は……。

「君達にはワシの暇潰しのために魔法少女リリカルなのはの世界に転生してもらう。異論は認めん。と言うより認められん。君達は死んだんだからのお」

もう一度言わせてくれ。

何でこうなった!?

目の前にいる変なおっさんは神様らしいんだが…信じたくねえ!

「変なおっさんは傷付くのお…」

「心読まれた!?!」

俺達三人は一緒に遊んでいただけなのに…。

目の前に居る神が自分の暇潰しのために俺達を殺したらしい。よし。

「一発殴らせろ!この糞ジジイ!!」

「落ち着いて!凜!」

「俺も殴りたい気持ちを無理矢理押さえ込んでるんだぞ」

数十分掛けて何とか落ち着いた俺、月影凜は神に転生先の事を聞く。

「で、魔法少女リリカル…何?」

「なのはじゃ。そのぐらい覚えてほしいのお」

「よし。やっぱ殴る」

「話が進まないから後にして」

「わかったよ。で、何でその世界なんだ」

「そのアニメが大好きだからじゃ。他に理由はない」

ダメだこの神。

頭の中腐ってやがる。

「ちなみに、時間軸は無印が始まる年の四月一日じゃ。主らの年齢は今の年から七引けばよい。

凜の能力は、主のオリジナル小説に出てくる魔法とかでいいじゃろ。

ちなみに見た目は長い銀髪に右目が紅、左目が蒼。性別は男じゃが、見た目はどう見ても女」

「殴りてえけど今は我慢してやる。で、詩織と蒼夜は？」

神谷詩織は俺と同じ年で、花咲蒼夜は一つ年上だ。で、さっき神が言った俺らの年齢から七引くと、俺と詩織が9歳（小学三年生）。蒼夜が10歳（小学四年生）だ。

「詩織の能力は：魔力属性で水と雷、氷じゃ。

蒼夜は炎と風、それと氷じゃの」

「何で全員魔力属性に氷があるんだよ」

「何となくに決まっておるじゃろ。（本当はそっちの方が面白い事が出来るからなんじゃが……）さあ、さっさと行った逝った」

「今不吉な感じが！って……」

「あああああああああああああああ！！」

「きゃあああああああああああああああ！！」

俺達は下に現れた黒い穴の中に落ちていった。
その中で俺達は決めた。

「あの糞ジジイ！次会ったら絶対ぶっ飛ばす！！」

そう、叫んだ直後に暗い空間から抜け出した。

俺達が今いる場所は海の真上。すんげえ高い所から落ちてる。

「能力貰ったはいいけど、どうすれば使えるんだよ！！」

「しらねーよ！ってか、このまま行ったらガチで死ぬぞ！！」

「さっき死んだばかりなのにまた死ぬのはいやあああああああ
！！」

〈マスター〉

俺達が諦めかけた時、どこからか機械音声が聞こえてきた。

〈マスター、ここです。あなたの首にぶら下がっています〉

もしかして……。

「ペンダント？」

〈はい〉

ペンダント。先月、俺達は友達の証の一つか、まあ……離れても互いの事を忘れないために、同じ種類の色違いを買ったんだっけ。いつまでも友達でいよう、と言う事で。

俺は白。蒼夜は青。詩織はオレンジだ。

〈名前を決めてください〉

名前って言われてもなあ……。

「リテイスでどうだ」

〈名前の登録完了〉

「クライス」

「アルテミス」

〈名前の登録、完了しました。

これから私達が言った事を真似て下さい〉

「わかったから早くしてくれ！」

〈わかりました。では、私たちの後に続いてください。

（我、使命を受けし者なり〉

「我、使命を受けし者なり」

〈契約のもと、その力を解き放て〉

「契約のもと、その力を解き放て」

〈闇は心に、光は大地に、そして友の誓いはこの胸に〉

「闇は心に、光は大地に、そして友の誓いはこの胸に」

『この手に魔法を…』

「リテイス」

「クライス」

「アルテミス」

『セットアップ！』

俺達の体が光に包まれる。

光が収まった時、俺の姿は指が出るようになってる白いグローブ手袋に、白いジャケットと黒いシャツ。下は何故かスカート。

詩織は白いシャツに青いジャケット。下は動きやすそうなジーンズと、私服に近い姿。

蒼夜は……完全に私服だ。

リテイスが言うにはこれはバリアジャケットと言うらしい。

あらかじめ中にバリアジャケットのイメージが入っていたそうだ。ぜってえ神の仕業だ。やっぱり殴るのはやめた。刺そう。気が済むまで思う存分刺そう。

へもう少しで海面に衝突します。飛ぶイメージをしてください」

俺は白い翼を広げて飛ぶイメージをした。すると、背中から本当に白い翼が生えた。

二人はそんなイメージをしなかったらしいから翼が生えていない。ギリギリ衝突を免れた俺達は誰もいなさそうな公園に下りて、リテイスを待機状態にした。

「凜、だよね？」

「そうだよ」

「女の子にしか見えないな」

「嬉しくない！ （女の子にしか見えないのはいいけど、性別が男なのは最悪！！ もう…なんでこんな目に…………）」

「で、ここはどこだよ」

「ここは海鳴市と言う場所ですね。此处から少し歩いた所にあなただ方の家が用意されています」

「それじゃあ、行ってみるか」

「ああ：／うん！」

クライスの案内で俺達の家らしき場所へ向かう。着いた場所は一軒家。三人で暮らすには広すぎないか？

「鍵はポストの中にあります」

ポストを開けると中に鍵が三つ。一つずつ取って鍵を開け、中に入る。電気のスイッチを切り替えると灯りが点いた。電気は通っているみたいだ。

一階にある居間に集まってこれからの事を話す。

「家はあるし生活する金は神が毎月、必要な額だけ何とかしてくれるみたいだ。問題は……」

「これがアニメの世界って事はわかったけど、正直、係わるとめんどくさそうだ」

「でも、私達は誰一人として原作を知らない」

「つまり、避けたくても避けられないかもしれないって事だな」

それに、小学校にも行かなきゃ行けないし……。

えーっと、確か、私立聖祥大府属小学校だったな。親が居ないのに大丈夫なのか？

プロローグ（後書き）

主人公達の使う魔法は俺がメインで書いてる「星降る地にて」に登場する魔法です。と、言いましても、そっちの話もほとんど進んでませんが。

感想、誤字脱字報告、待ってます。

1話（前書き）

早速書きあがった。

今回もグツダグダです。

視点は詩織。

本編をどぞ。

1話

あれから時は流れて小学校の始業式。

私と凜は三年生で同じクラス。蒼夜は一つ年上だから四年生で、私は今凜を起こしに来たんだけど……。

「眠い……」

いくら声を掛けても起きてくれない。

「今日は始業式でしょ」

「学校だるい。休む」

「ダメだって！」

掛け布団を無理矢理引き剥がす。長く綺麗な銀髪に白い肌、整った顔立ちはとても男の子には見えなくて、まるで人形のような女の子に見える。私より身長が低く、かなりの運動音痴。ただし、走るのは早い。

学校は神が何とかしてくれたから問題は無かったよ。

「うう…：わかったよ。準備するから部屋から出て」

「わかればいいのよ」

一階に下りてダイニングに向かう。朝食と昼食は私と蒼夜が交代で作ってる。理由は学校が始まるとお弁当が必要だから。夕食は凜が毎日作ってる。今日の当番は朝食が蒼夜。昼食が私。

「おはよ〜」

制服に着替えた凜が下りてきた。まだ眠たいのか、目を擦りながらゆっくりとやってくる。

「飯できたから食うぞー」

「はい」

「うん……」

朝食は食パン一枚と目玉焼きにウインナーとサラダ。凜はいつも食パンを半分しか食べないから蒼夜に渡してる。

「今日は質問攻めにあうだろうからがんばれよ」
「うん」

朝食が食べ終わって食器を流しに置く。
荷物を纏めたらみんな一緒に家を出る。
小学校の間は行きだけ送迎バスがあって、乗り場は住んでる場所で決まっている。

私達がバスに乗ると、後部座席のほうで金髪の女の子が私達に手を振っていた。私達は彼女の近くの空いている席に腰掛けた。

「おはよう。あんた達って転校生よね？」

「そうだけど」

「私はアリサ・バニングス」

「私は月村すずか。よろしくね」

「私は高町なのは。よろしくなの」

「俺は月影凜。言っとくけど男だからな」

『嘘だ！ 絶対に嘘だ！ 嘘だと言ってくれ！！』

バスに乗っていた全員の声がハモっていた。
そりゃ、信じられないよね。

「よし：後で全員一発ずつ殴らせろ……いや、半殺しかな？」
「やめとけ／やめなさい」

三人とも顔が引き攣ってるじゃない。

「私は神谷詩織」

「俺は花咲蒼夜だ」

「三人はどこから来たの？」

「東京からだよ」

「三ヶ月前に俺達の家族が死んだんだ。唯一、凜の親戚にだけ連絡が取れて、一緒に住む事はできないけど、住む所と生活費は何とかしてあげる。って」

「それで三人一緒に住んでるんだ」

苦しいけど、それが一週間という短い期間で出す事のできた解決策。最初に言っておけば後で質問される事はなくなるはず。噂の広まるスピードは予想をかなり超えるものだし。

「そう…」

「悲しくないの？」

「悲しいけど、いつまでも泣いてると安心して寝てくれないだろ」
「そっか：そうだよね」

暫く話していると学校に着いた。

私達はバスを降りて、職員室に向かうと言って三人と別れた。

職員室で先生と話して体育館に向かう。

すでに生徒は全員集まっているらしい。

体育館の隅っこで校長先生の話が終わるのを待つ。どこの学校でも校長先生の話は長いんだなあ。

「ええ、本日は転入生が三人います。どうぞ、上がってきてください」

体育館の壇上に行く。校長先生に紹介されて軽く挨拶をする程度らしい。

「三年生の月影凜くん」

「はい。ちなみに男です」

『嘘だあああああつあつあああああ！！』

バスの時とは比べ物にならないほどの声が聞こえる。バスで聞いた人達は笑いを堪えているけど。

「よし……全員、地獄に落としてやる………」

「ここは学校だよ。何先生達の前で半殺し宣言してんの」

怒りたいのはわかるけどここは堪えてくれないかな。

「同じく三年生の神谷詩織さん」

「はい」

「四年生の花咲蒼夜くん」

「はい」

それから少し時間が経って今は教室。

質問攻めにあってます。あ、凜がきれた。まあ、男に告白されたんだからきれてもしようがないかな。

「俺は…男だっつってんだろおがぁ！！」

殴ろうとしてたけど腕を掴まれた。

「冗談はやめようぜ。ただかまって欲しいだけなんだろう？」

「冗談なんかじゃねえ！ 本当だ！」

頑張って振り解こうとしてるけど、私よりも力が弱いんだから無理だよ。

流石に止めないと思って思った時、アリサが男の子の手を掴んだ。

「嫌がってるんだからやめなさいよ！」

アリサが止めに入った事で男の子は一言謝って席に戻った。

「助かったよバニングス」

「お礼なんていいわよ。後、私の事はアリサって呼んで。私もあなたの事を凜って呼ぶから」

「わかったよ。アリサ」

「私達の事も名前と呼んで欲しいの」

「なのはとすずかだったね。わかった」

「詩織ちゃんもよろしくなの」

「よろしく」

また時間が流れて放課後、なのはの両親が経営している喫茶翠屋で私達の歓迎会が開かれる事になった。花咲くんにも連絡して合流し、六人で翠屋に来ている。

「それにしても、バスと体育館でのみんなの反応、面白かったなあ」

凜が今日の事を思い出して笑っている。

「あれってわざとだったの!？」

「俺があんな事くらいできるわけないじゃん。でも、告白された時のは本気でできたぞ」

「あれは向こうがいけないわね」

「何だ、凜。男に告られたのか？」

「ああ」

「そりゃ……クククッ……きれても仕方ねえな」

滅茶苦茶笑ってます。この人。

「こんにちは、アリサちゃん、すずかちゃん。なのは、この子達が今日転入してきた子達かい？」

「そうだよ、お父さん」

「お父さん!？」

私達三人の声がハモる。見えない。とても子持ちには見えないよ。この人。

「どうしたんだ?そんなに驚いて」

「とても子持ちには見えなくて、つい」

「はっはっは。そうか。私はなのはの父の高町士郎だ」

「月影凜です」

「神谷詩織です」

「花咲蒼夜です」

奥からなのはと同じ栗色の髪的女性が料理を持って出てきた。

「私はなのはの母の高町桃子よ。よろしくね。凜ちゃん、詩織ちゃん、蒼夜くん」

その後、昼食を食べてデザートのカークを食べながら互いの家の事を話した。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、三人は塾があるから、メアドと電話番号を交換してお開きになった。

1話（後書き）

このペースで行くといつ無印に突入するんだろ。
いつそのこと時間を飛ばすか。

特に面白いことも起きないし。

感想、誤字脱字報告、待ってます。

2話（前書き）

今回は蒼夜視点です。
かなり短いです。
本編をどうぞ。

2話

よし、落ち着こう。とにかく冷静に考えろ……………ナンデコウナツタ。

どう、蒼夜です。神の気まぐれによって殺され、転生させられた三人のうちの一人です。

で、今の現状を説明すると、だ。

「どれでもいいから好きな得物を取れ！」

なのはのお兄さんの恭也さんに道場に連れ込まれ、何故か戦う事になりました。

もう一度言わせてくれ……………ナンデコウナツタ！

俺はただ、なのははやらんぞ！って言われたから要りませんって答えただけなのに。

一応わかった事は、恭也さんは極度のシスコンである事。だけど美由紀さんには厳しい。

「俺、素手で戦う方がやりやすいんですけど」

「そうか……………小太刀二刀御神流の剣術を習得している俺に対して素手で挑もうと言うのか……………」

うわぁ…何か凄そう。よくわかんないけど何か凄そう。

「ほう。恭也に対して素手か。お手並み拝見といこうかな」

「蒼夜さん、頑張ってー！」

「花咲くん、頑張ってね！」

「蒼夜、負けんなよ」

一人ゆるい!!

「行くぞ!」

早っ!この人本当に人間!?

「はああああああああああ!」

右手に持つてる小太刀を振り下ろしてきたから、裏をとれるように回転しながら手首を左手で掴み、そのままの勢いで裏回し蹴りを叩き込む。

凜と二刀流の相手に対しての訓練しといてよかった。二刀流の相手に対してはどっちかの武器での攻撃に対し、外側に回転しながら避けて裏を取る。その際に手首を握ると後ろへの攻撃が難しくなる。

「俺、始めて女に間違われて良かったって思ったよ……」

凜。みんな、どんな反応すればいいのか困ってるぞ。

「このくらいで負けるかあ!」

やっぱ鳩尾と顎に掌底叩き込まないとダメか。

「ふう……行きます!」

息を少し吐いて体の力を抜く。直後、俺の姿はみんなからすれば消えたように見えただろう。本当は目視できない速度で動いただけだ。恭也さんの懷に潜り込み、鳩尾に掌底を放つ。

「がっ……!」

恭也さんの体が一メートルほど吹っ飛ぶ。後で凜と詩織に怒られんだろうなあ。

「今のはかなり効いたな。今度はこっちから行くぞ！」

今度は恭也さんの姿が消えた。

まあ、見えてるんだけどね。後ろからの下段切り上げ、横薙ぎ、袈裟切りをギリギリで躲し、隙を窺うけどハッキリ言っていない。

魔法を使つての戦闘もそうだけど、剣術や武術を前の世界で習つてたわけじゃないからこのままじゃ負けるな。

「はあああああああ！」

やばっ！

高速の突きをギリギリで躲すがそこに狙っていたかのように薙ぎ払いが鳩尾に入る。

薄れていく意識の中で思った。シスコンはある意味人類最強だと……。

「…うつ……ここは、俺の部屋？」

「やっと目が覚めた」

「心配したんだよ」

凜と詩織がベッドの側に座っていた。

「心配かけてすまなかったな」

「まあ、いいけどよ。今日の晩飯はお粥でいいよな？」

「ああ。あんまり食える気がしない」

凜は部屋を出て行った。今、俺の部屋に居るのは詩織と俺。正直、
気まずい。

「何で一般人に対して“アレ”を使ったのかな」

アレって言うのは俺が今日使った高速移動術。足の裏に空気のか
くを作って圧縮し、開放する際に生じる爆発的なエネルギーを利用す
る方法。これを使用できるのは俺だけ。名前はエア・ムーブ。

「そうでもないと思っただから」

「まあ、いっか。相手の方が早さも技量も上だったし、それ以外に
力を使ってないしね。あれだけならばれないでしょ」

「お粥できたよ」

「はーい。持ってくるから待っててね」

「ありがとな」

はあ……世の中、化け物みたいな人間が居るんだな……。

2話（後書き）

シスコン最強すぎるだろ！
次回から無印突入です。

感想、誤字脱字報告、待ってます。

3話（前書き）

グダグダです。
文才がほしい。

では、本編をどうぞ。

3話

森の中。

一人の少年が、腕から血を流している状態で辺りを警戒している。近くの茂みが揺れた。少年はそれに反応して、赤い宝石のようなものを突き出す。少年の指先に触れている状態で浮いているそれは強く輝き出し、少年の前方にミッド式の魔方陣が展開される。

それを見た異形は茂みの中から飛び出し、少年に襲い掛かる。

「妙なる響き、光となれ！ 許されざるものを、封印の輪に！ ジュエルシード、封印！！」

異形が魔方陣に激突する。少年と異形の間で光はより、強くあふれ出し、異形の体を吹き飛ばした。

少年は力尽きたのか、その場に倒れ、光に包まれた。光が収まった時、姿を現したのは少年ではなくフェレットもどきだった。

凜side

変な夢を見た。ってか、あれって夢なのか？ 妙にはっきりと覚えてるし、夢のような気がしない。もしかしたら物語りに強く影響するものか。

「凜、起きてる？」

俺は朝が弱いから詩織がいつも起こしに来てくれる。

「起きてるよ」

返事をしたらドアが勢いよく開け放たれた。壊れそうだな。

「凜：熱ないよね？」

「ないよ。珍しく早起きしたからってそこまでなる？」

「うん」

酷いなあ。

「まだ眠いけど、変な夢を見たから寝る気にならない」

「変な夢って、男の子が化け物に襲われてる夢？」

「そうだよ」

これは詩織も見たな。って事は、他にも見てそうだな。それに、魔法形態がミッド式だったし。

「関わらないって選択肢……ないよね？」

「あの糞ジジイが許してくれねえだろ」

蒼夜の言うとおりでけど、できれば平穏な日々をすごしたいなあ。

——糞ジジイは傷つくのお……——

今、何か聞こえたような……気のせいかな。

「着替えるから出てってくれない？」

「わかった」

「もうすぐで飯、できるからな」

二人が出てってから制服に着替える。

一階に下りて洗面所で顔を洗う。

《マスター》

《何？》

《この街に魔力を保有している者が入り込みました》

《それなら心当たりがあるから大丈夫だよ。悪い奴じゃないはずだから》

《わかりました》

鏡を見る度に、これが俺なんだな……って思う。

髪の毛の長さは元から長かったし、女顔だったのは自覚してる……女顔でいいのかな？女顔って、当然と言えば当然だったんだけどな……

……だけど、面影を少しだけ残してこの姿にするって酷すぎるだろ。髪をゴムで一つに纏める。そのままにしとくと動きづらい。

ダイニングに行って椅子に座る。ちようどご飯ができたみたい。

食パンを半分に割いて蒼夜に渡す。流石にこの量を食べるのはきついからね。

食器を片付け、弁当を持って家を出る。

バス停に着いた時にはすでにバスが来てた。

「おはよー。凜、詩織、蒼夜」

「おはよう。凜ちゃん、詩織ちゃん、蒼夜くん」

「おはよう。アリサ、なのは、すずか」

俺の呼び方は自由にしてくれって言ったところだった。別にいい

けど。このくらい。
暫く談笑して学校に着くのを待った。

時は流れて昼休み。俺、詩織、蒼夜、なのは、アリサ、すずかの
六人で屋上に集まり、昼飯を食べてる。

「将来の夢かあ…」

ポツリと、なのはが呟く。

今からそんな事に悩めるって凄いなあ。

「二人はもう決まってるんだよね？」

「うちは両親が会社経営だから、いっぱい勉強して後継がないと
って思ってるぐらいだけど」

「私は…機械系が好きだから、工学系の専門職につけたらいいなあ。
って」

「二人とも凄いな」

「そういうあんた達はどんなのよ？」

「特に考えてない」

俺達三人の意見は同じ。

「ただ、今を楽しく生きるだけ」

「時期が来たら自然と進路も決まってくるし…」

「ただ、やれる事を狭めないように知識は増やしておく」

今はそれだけでいい。

「ちゃんと考えてるんじゃない」

「そうか？」

「みんな凄いなあ」

「なのはは喫茶翠屋の二代目だろうけど、それに断定しないで今は浅く、広く知識を増やせばいい」

「職が決まったらそれに対しての知識を深くしていけばいい」

「そっか：そうだよね！」

元氣になったみたいだな。

また時は流れて、五時間目の体育の授業。

内容はドッジボール。チームは二つ。

Aチームが俺、詩織、なのは、クラスメイト。

Bチームはアリサ、すずか、クラスメイト。

すずかの投げたボールが俺に向かって飛んできた。

「ひゃっ！」

顔に当たりそうだったから手で防いだんだけど、思ったより痛かった。次に狙われたのはなのは。何もない所で転んでボールがヒット。

それから次々と当てられて出て行き、最後まで残っていた詩織とすずかの一騎打ち。

……なんだけど。ねえ、これってドッジボールだよ？ 何でこんなに球が速いのかな？

ねえ、すずかって人間だよ？ 何であの速さの球を取れるのかな？

ねえ、詩織、魔法を使ってないよね？ 何で手の動きが見えないのかな？

ねえ、これって本当にドッジボール？ ボールがたくさん見えるんですけど。ってか、ドッジボールという名の殺人競技ではないんですか？？

結果は授業終了のチャイムが鳴って引き分け。

ねえ、これって小学生のドッジボールだよね？ 俺の記憶では一試合だけで授業が終わった事ないんだけど。

詩織 side

放課後。私達は六人で一緒に下校してます。

「今日のすずかと詩織、ドッジボール凄かったね」
「うん。途中からボールがたくさん見えたの」

ちょっと、否、かなりやり過ぎちゃったかな。

「どうすればあんな球、投げられるの？」

凜が首を傾げながら聞いてきた。お願い、首を傾げないで！
抱きしめたくなくなっちゃうから！！

——ワンワンワン！——

「Be quiet」

犬が吠え出したのをアリサが黙らせた。

《魔法は使っていないよな?》

不意に蒼夜から念話してきた。

《使っていないよ》

《ならいい》

人前で魔法の乱用はしないよ。

「ああ、こっちこっち。ここを通ると塾に近道なんだ」

「そうなの?」

「ちよつと道悪いけどね」

「それじゃあ、俺たちはここで」

「またね／またな」

「ばいばい」

なのは達と別れて家に帰る。

「凜。今日の晩ご飯何?」

「オムライス。材料が足りないから一旦家に帰って買いに行かなきゃ」

「できればホワイトソースも作ってくれね?」

「いいよ。多めに作って冷凍保存するから」

凜って、家庭がアレだったから料理が上手なんだよね。

《助けて》

「っ!？」

《助けて!》

「どうする？」

「ほっとく」

「場所なのは達が通ってる場所だ。今から行ったら不自然だろ？」
「それもそうだね」

彼女達が助けるよね。

蒼夜 side

夜になったけど、あれから声は——念話は届いてない。

《聞こえますか？ 僕の声が、聞こえますか？》

きた！

《聞いてください。僕の声が聞こえるあなた。お願いです！ 僕に
少しだけ、力を貸してください!》

リンカーコアを持つもの全員に届くようにしてるな。まったく…面倒だ。

《お願い！ 僕の所へ！ 時間が…危険が……もう!》

念話が切れた。事態は急を要するようだな。

「凜！ 詩織！」

「もう準備はできてる！」

「先に行くよ！」

「わかった。すぐに追いつく！」

寝巻きから着替えて外に出る。

「エア・ムーブ」

足の裏に空気の塊を作り圧縮、解放して爆発的な速さで進む移動魔法。方向転換の時は掌に空気の塊を作り圧縮、解放ではなく行きたい方とは逆に向けて放出する。

そうして現場に着いた時、化け物に襲われているのはとフェレットもどきを、両手に剣の形に氷を纏って、それを使って凜が守り、少し離れた所から詩織が魔力の矢を放っていた。

「クライス、セットアップ！」

〈Stand by ready, set up〉

俺の体が光に包まれる。バリアジャケットを身に纏い、両手に籠手が装着される。

光が弾けると同時にエア・ムーブを発動して化け物の目の前まで駆ける。

「空破掌！」

掌で圧縮した空気を解き放って異形を吹き飛ばす。

「凄い…！」

なのはとフェレットが賞賛の声を上げる。そんな事してる余裕があるんだったら逃げてくれねえかな。

「なのは、いい？ 行くよ！」

「うん」

何をするつもりだ？ ってかなのはに赤い宝石渡してるし。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「えと…契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は……」

「そして、不屈の心は……」

『この胸に！』

『この手に魔法を、レイジングハート。セットアップ！』

＜Stand by ready, set up＞

赤い宝石——今レイジングハートって聞こえたな——からピンク色の光が立ち昇り、天を貫いた。

「なんて魔力だ……」

「そんな事ばやいてる場合か…！」

三人のツツコミがフェレットに浴びせられる。

あのままじゃ魔力切れでぶっ倒れるぞ。

「落ち着いてイメージして。君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そして、君の身を守る、強い衣服の姿を！」

「そ、そんな！ 急に言われても……えと……えーとお………と、とりあえず、これで！」

なのはの体が光に包まれる。光が弾けた時には杖と、どこか聖祥小の制服に似てるバリアジャケットを身に纏っていた。

「成功だ」

のんきだなあっと、危ない危ない。俺は突っ込んできた異形の攻撃を躲す。そのまま異形が突き進む先に居るのはなのは。って、やばい！

「きゃああああああ！」

〈Protection〉

レイジングハートがそう言ったのが聞こえた。直後、なのはを守るように障壁が展開され、化け物を弾く。

「詩織、蒼夜。今までの憂さ晴らしにあれやるぞ！」

「わかった／おう！」

俺は目の前に氷塊を、詩織は大きな氷の矢を、凜は冷気の塊を作ってそれぞれ構える。

「貫け！」

「吹き飛ばせ！」

「切り裂け！」

『ダイアモンドダスト…ブレイカー!!』

俺達はそれぞれ氷塊を殴り飛ばし、氷の矢を放ち、冷気の斬撃を飛ばす。それぞれの攻撃は化け物に当たる直前で合わさり、周囲を凍りつかせながら化け物を吹き飛ばす。

「ふう…全力ではないけどこれだけやれば大丈夫だろ」

凜はそう言うけど、今のはやりすぎたかな。化け物の様子を見に行くと、青い宝石が落ちていた。

「これは？」

「ジュエルシールドだよ。なのは、封印して」

「うん」

無事終わったみたいだな。ジュエルシールドはレイジングハートの中に入っていた。

フェレットが失神した。これから取る行動は……。

「逃げるぞ！」

「うん！／おう！」

「待つてゝ！」

凜side

近くの公園まで走った俺達は、ベンチに座って休憩していた。

「すみません」

フレットが起きたようだな。

「あ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で。怪我、痛くない？」

「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

フレットはそう言って体を小刻みに震わせて包帯を取った。

「ほんとだ。怪我の跡がほとんど消えてる。凄おい」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」

「よくわかんないけど、そうなんだ。ねえ、自己紹介していい」

「あ、うん」

「えへん」

小さく咳払いしてるけど意味ないぞ。

「私、高町なのは。小学校三年生。家族とか、仲良しの友達は、なのはって呼ぶよ」

「俺は月影凜。凜って呼んでくれ。これでも男だからな」

「嘘……」

「信じられないよね。私は神谷詩織。凜となのはの親友」

「俺は花咲蒼夜。こいつらより一つ年上だ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノくんか」

「ユーノ」

「何？凜」

「ちょっと来てくれ」

俺の差し出した両手の上にユーノが乗る。

「やっぱ可愛い」

ユーノを苦しくないように抱きしめる。やっぱ動物は可愛い。けどユーノが暴れてるから離れた。

「すみません。あなた方を巻き込んでしまいました」

「気にすんな」

「そろそろ帰ったほうが良くない？」

「なのはは親がちゃんと居るんだし、早く帰らないと怒られるぞ」

「そうだった。ユーノくん、私の家に行こう」

「この後の事は念話で話せばいいだろ」

「わかりました」

「またな」

「じゃあね」

「じゃあな」

「ばいばい」

眠い。家帰って早く寝よ。

3話（後書き）

凜は動物大好きです。

すずかの家に行ったらどうなるんだろ？

では、また次回！

感想、誤字脱字報告待ってます

4話（前書き）

うーん。

原作あると話はすぐに書けるんだけど、グダグダになるなあ。
否、他のでもグダグダか。

本編をどぞ

4話

蒼夜side

午前六時半。

俺は現在、庭で凧と剣を使って模擬戦をしている。もちろん、境界を張ってだ。

「氷牙・連突！」

氷剣での連続突きを必要最低限の動きで躲し、下段から斬り上げを放つ。それが凧に命中すると碎け散り、そこに残ったのは凧だった氷。

「アイス・ソルジャー」

凧の得意とする氷魔法の一つ。その名の通り氷の兵隊を作り、それに戦わせながら隙について本体が攻撃してくる。目の前の敵だけじゃなく、他の動きにも対応しなきゃならない。凧が言うには、目で見えるものだけじゃなく、目で見えないものにも判断する練習らしい。気配を感じ取れて事らしいんだけど、ほとんど気配がほとんどないから難しい。

「真空斬！」

背後、否、四方位攻撃。回避するのは不可能。だったら！

「風爆・連舞！」

八発の爆発する風弾で打ち落とす。煙が視界を悪くし、全く見えなくなる。

「チェックメイト」

背後から短刀を首筋に当てられる。また負けたあ。

「何で、気配がそんなにないんだよ」

「お前らと訓練してたら気配が絶てるようになってた」

「嘘だろ…」

「嘘じゃないよ。最初は気配が薄くなる程度だったけど、自然と気配が絶てるようになってたんだ。まだ完全じゃないけど」

そっかあ…

「風爆使った後はすぐに風で吹き飛ばすか、煙の外で相手に攻撃できるようにしないとダメだよ。」

それじゃ、シャワー浴びてくる」

「ああ、わかった」

俺らの能力も凜が小説で書いてたものらしい。結構、化け物じみた魔法だよな。

詩織 side

今日から朝と夕方に訓練することになった。私は最初に凜とやって負けた。蒼夜くんとの模擬戦は夕方にして終り。

凜が言うには私達の実力はほぼ同じ。凜が毎回勝つのは自分が書いてた小説に出てくる魔法だから対策はあるらしい。魔法のイメージは自分たちで考えて、昨夜みたいな技は凜からの提案で、実は技名が決まっただけで個人技の名前のままになったんだ。

今は学校で授業を受けてます。ユーノと念話してます。で、今日気付いた事は、なのはは嘘をつくのが苦手だと言うこと。二人に昨日の事をごまかしてた時に不自然な笑いかたしてたから。

《ジュエルシードは、僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は、手にしたものの願いをかなえる魔法の石だけど。力の発現が不安定で：昨夜みたいに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加えることもあるし……たまたま見つけた人や動物が、間違っただけで使ってしまったって、それを取り込んで暴走することもある》

《そんな危ない物が、なんでうちのご近所に？》

《僕のせいなんだ：僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して：調査団に依頼して、保管してもらったんだけど……運んでいた時空艦船が、事故か、何らかの人為的災害にあってしまっただけ》

ユーノのせいじゃないと思うけどなあ。

《二十一個のジュエルシードが、この世界に散らばってしまった。今まで見つけられたのはたった二つ》

《あと、十九個かあ：あれ、ちょっと待って。話を聞く限りじゃ、ジュエルシードが散らばっちゃったのって全然ユーノくんのせいじゃないんじゃない》

《だけど、あれを見つけてしまったのは僕だから：見つけて、ちゃ

んとあるべき場所に返さないとダメだから》

何でこの世界の子どもは確りした子が多いのかな？ 私たちも今は子どもだけど、元居た世界での年齢は私と凜が十六歳。蒼夜くんは十七歳。九歳の時にここまで責任を感じたり、将来の事で悩んだ事なんてなかった。

《何となく…何となくだけど、ユーノくんの気持ち、わかるかもしれない。真面目なんだね、ユーノくんは》

《えーと、昨夜は巻き込んだって、助けてもらって本当に申し訳なかったけど…この後、僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらいたいただけなんだ。一週間、否、五日もあれば力が…》
《ストップだ。ユーノ》

《凜？／凜ちゃん？》

《お前は一人で抱え込みすぎだ。もう少し周りを頼れ。俺達はそんな事で迷惑なんて思わないから》

久しぶりに聞いたな。凜の優しそうな声。

《世の中、信じられない神が凄く迷惑をかけてる事もあるんだから》
《確かに》

凜の今の言葉には私も蒼夜くんも納得。

《例えば？》

《桃子さん》

あ、あれは確かに迷惑だよ。凜にとっては。この前はメイド服着せられてたね。翠屋の手伝いで。

《ごめんね、凜ちゃん》

《なのはが謝る事はないよ》

《迷惑じゃない？》

《さっきも言ったよね？もう少し周りを頼れって》

《このくらしいの迷惑、俺達は何とも思わない》

《私の好きな言葉にね、『この世に偶然はない。あるのは必然のみだ』って言葉があるの。だからこの出会いも偶然なんかじゃなくて必然》

それに、あの神様の理不尽さよりマシだからね。

《よろしく、お願いします》

凜side

これで良かったんだよな。現在、アリサとすずかと別れて四人で帰ってる。

《そう言えば、三人はどこでデバイスを手に入れたの？》

《それは……》

ヤバイ。考えてなかった！どうしようどうしよう！

《露天商で買った》

そんなんで誤魔化せるの！？

《三つしかないものらしくてな。値段は結構高かったけど、俺達の誓いみたいな物だからな》

《な、何で露天商にデバイスが…?》

《俺も知らん。買って二日後に急に起動したんだ》

《そうなんだ》

誤魔化せた!?

凄いなあ。素直なのかな?

「っ!？」

今の感覚…ジュエルシード!

《ユーノくん、今のって?》

《新しいジュエルシードが発動している。すぐ近く!》

《先に発動場所まで行ってる》

《わかった。僕もすぐに行くよ》

こんなに人が多いんじゃないからな。魔法は使えないからな。それでも、この中で一番早いけど。

場所は神社か。ユーのもちようど来た。それにしても、うへえ。この階段を上るの?人の姿はみえないし、魔法使っちゃえ!

「リテイス」

「クライス」

「アルテミス」

『セットアップ!』

『Stand by ready, set up』

これで飛んでける。

「なのは、ユーノ、捕まって」

「わ、わかった／うん」

背中から生えてる白い翼に驚いてるのかな？
上り終わった所には目が四つある異形。

「原住生物を取り込んでる」

「ど、どうなるの？／どうなるんだ？」

「実態がある分、手強くなってる!」

「大丈夫。たぶん」

「なのは、早くデバイスを起動させろ」

「え？起動って何だっけ？」

「はああ：レイジングハート、セットアップって言ってみろ」

「時間稼ぎはするから」

「俺達は封印できねえからな」

「わかったの。レイジングハート、セットアップ!」

〈Stand by ready, set up〉

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

突っ込んできたか。

「アイス・シエル!」

氷の壁に激突し、砕きやがった。

「風爆！」

攻撃を食らう直前に蒼夜が吹き飛ばしてくれた。

「蒼夜、助かった」

「まだ終わってねーぞ！」

「なのは、私たちが動きを止めるから、そしたら封印して」

「わかったの！」

「リテイス、モード・ハンドガン」

〈了解〉

リテイスが剣の状態から一丁のハンドガンになった。

「グオオオオオオオオオオ！」

「させるか。裂碎脚！」

突っ込んできた異形の上から蒼夜が体を捻りながら蹴り、叩き伏せる。

「五月雨！」

詩織が上空に二十本以上の魔力の矢を放つ。それは質量があるように重力に従って異形に降り注ぐ。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

「凍りつけ：フリーズ・ショット」

その隙に異形の足元目掛けて冷たい魔力弾を放つ。着弾した場所から凍りつき、異形の動きを封じる。

「今だ、なのは！」

「うん！レイジングハート、お願いね」

〈All right. Sealing mode, set up〉

レイジングハートから羽のようなものが飛び出す。ピンク色の紐が異形の身体に張り付き、額に？？の文字が浮かぶ。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル？？、封印！」

〈Sealing〉

ジュエルシードの封印は無事に終え、レイジングハートの中に入っていた。取り込まれていた犬は側で気絶していた女の人が連れて帰った。

高町なのは。覚悟を持たない、正義感の強い女の子か。俺の、嫌いなタイプの人間だ。

4話（後書き）

次回から原作を崩していきます。
少しだけけどね。

5話(前書き)

書き終わりました！

いつもどおりggggです。

5話

凜side

ある日の夜。

ジュエルシード探しも含めてテキトーにぶらぶらしてた俺は、目の前でアリサが大人の男五人に拉致されかけてるのを見た。

「ちょっと！離しなさいよ！」

「おい！誰かコイツを黙らせろ！」

あ。アリサを押さえつけてた人が噛まれた。

「つてえ！この餓鬼！」

流石にまずいなあ。ちょうどいい大きさの石は…あった。

「それ」

「いて！誰だ！！」

「凜！」

「アリサ、目え閉じてろ」

「何で？」

「いいから目え閉じてろ」

もう一度言っているとアリサは素直に目を閉じた。さあて、やりますか。

「カシムル
神速…」

「なっ!?!」

「消えた!?!?」

「眠りな」

「ぐあっ!」

電撃を浴びせて気絶させる。まあ、食らった本人達はスタンガン
とは思わないでしょ。他の人に見られてない限り。

「アリサ。もういいよ」

「え?何これ!?!あんた何したの!?!」

「スタンガンで気絶させた。警察は呼んだから逃げるぞ」

「ちよっ!待ちなさいよ!何で逃げる必要があるのよ!?!」

「いろいろな面倒なことになるからだ!子どもが大人の男五人を気絶
させるってどう考えてもありえねえだろ!?!ついでに家まで送って
く!」

ある程度さっきの場所から離れたら、走るのをやめてアリサを家
まで送った。この世界に平穏というものはないのか?

詩織 side

今日はすずかの家に遊びに来てます。それで今は……。

「可愛い」

「にゃ」

凜がネコとじゃれてます。ネコも可愛いけど、今の凜の笑顔も可愛い。

「未だに凜が男つてのが信じられないわ」
「にゃー」

アリサの発言にネコも同意してる。恭也さんと忍さん、ノエルさんにファリンちゃんも『嘘だ!』って言ってたっけ。そう言えば、前に恭也さんに会った時、誤解を解いてなかったんだよね。

《凜って、この前も思ったんだけど：動物好き?》

《動物も好きだけど、どっちかって言う则可愛いものが大好きかな。だからユーノを抱きしめたりするし》

《動物の縫いぐるみも幾つか部屋にあるぞ》

《そうなの?》

まあ、そういう男の子って結構いるからおかしな事じゃないしね。

「家に来た時もそうだけど、凜って本当に動物大好きよね」

「動物に好かれて羨ましいの」

「なのはも結構好かれてるじゃない」

「あそこまで行くと、本当に動物が大好きな奴じゃないと大変だぞ」

野良ネコとじゃれてる時もあるけど、凜の言う事をちゃんと聞いてるのよね。

この前なんて、『ごめんね。今急いでの。また今度ね』って言うたら向こうから去ってったし。

「キューキュー!」

ユーノがネコに追いかけられてる。凜、お願い。って、ネコとじやれるのに夢中で気づいてない！

「ユーノくん！」

「アイ！ダメだよ！」

「はい、お待たせしました。イチゴミルクティーと、クリームチーズクッキーです」

フアインさん、タイミング悪すぎ！ああ、危ない！

「きゃああ！」

「フアイン！」

「っと、大丈夫か？」

「は、はい！ありがとうございます。蒼夜さん」

蒼夜、ナイス！

「え、さっきまでそこに居たのに！」

アリサとすずかが驚いてる。そりゃ、一瞬であそこまで行ってフアインさんを支え、更に紅茶やクッキーも落としてないんだからね。魔法を使うのは極力控えてって言ったのに。

「凜…いつまでネコとじゃれてるんだ？」

「気が済むまで♪」

「は…程々にしとけよ」

「は…い♪」

精神が肉体に引っ張られてるのかな？最近、凜が子どもっぽくなっててる。あ、ネコ二匹抱えてきた。

「少し疲れた〜」

「ユーノくん、大丈夫？」

「キュッ」

「ユーノを追いかけてちゃダメだよ」

「にゃー！」

本当にわかってるのかな？

「蒼夜さん、さっきのどうやったんですか？」

「内緒だ」

言えるわけないよね〜。

「凜と詩織は何か知ってんでしょ？」

「知ってるけど教えない」

「と言うより、教えられないが正解かな」

「どうしてもダメ？」

「自ら危険に突っ込む気か？」

「それってどう言う……」

「何て冗談だ。恭也さんと俺が戦った時、恭也さんが消えただろ。あれと似たようなものだ」

かなり違うけど、こう言うしかないよね。あの人は魔力がないのに強かった。魔法を使った蒼夜くんより。

「そうなんですか？」

「ああ。少し負担が掛かるけどな。あんまり多用できない」

これは本当。空気を圧縮し、解放した時のエネルギーは足裏で使

えば足に、掌で使えば腕に反動が来る。凜が言うには力を正確にコントロールできるようになれば反動はなくなるらしいんだけど…本当かな？

「しかし、相変わらずずずかん家はネコ天国よね」

「ふふふ」

「でも、子猫たち可愛いよね」

「うん。里親が決まってる子もいるからお別れもしなきゃならないし」

「そっか。ちょっと、寂しいね」

「そんなものか？」

蒼夜、もう少し相手の心を考えないとダメだよ。小声で言ったから聞こえてないみたいだけど。

「でも、子猫たちが大きくなってってくれるのは嬉しいよ」
「そうだね」

凜、少しは会話に参加しようよ。さっきからネコとじゃれてばかりじゃん！

「っ!？」

《なのは!》

《うん。すぐ近くだ!》

《どうする?》

《えっと…》

《さきにユーノが逝って（誤字にあらず）、それをなのはが追いかける。最後に俺かな》

《私たちは?》

《大勢で行ったら不自然だろ。二人はここに残って》

《わかった》

ユーノが飛び出した。

「ユーノくん？」

「あらら？ユーノどうかしたの？」

「うん。何か見つけたのかも。ちょっと、探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫。すぐ戻ってくるから待っててね」

「面白そうだから俺も行こ。なのはが転ぶかもしれないし」

「それはあんたじゃないの？」

「そこまで運動神経は悪くない！」

まあ、三人に任せるかな。

凛side

ユーノとなのはを追いかけてるんだけど、足遅いなあ。ユーノはフエレット状態だから仕方ないけど。

「発動した！？」

「ここだと人目が：結界を作らなきゃ」

「結界？」

「なのはが魔法を始めて使用した時の空間だ」

「魔法効果の生じてる空間と、通常空間の時間進行をずらすの。僕も少しは、得意な魔法。」

あまり広い空間は無理だけど、この家の付近くらいなら……何とか」

結界は無事張れたみたいだな。向こうで光が、眩しい。光が収まった時、そこにあったのは……。

『にゃー』

「……………」

「あれに飛びつかれたら死んじやうなあ……」

ユーノの顔が面白くなった。

『にゃおおん』

「あ…あ、あ、あれは…？」

「たぶん……………」

『にゃおおん』

「あのネコの大きくなりたいてって思いが正しく叶えられたんじゃないかな？」

「そ、そっかあ……………」

誰でも驚きます。あの大きさは絶対に。

「だけど、このままじゃ危険だから、元に戻さない」と

「そ、そうだね。さすがにあのサイズだと、すずかちゃんも困っちゃうだろうし」

そう言う問題じゃないだろ。

『にゃおん』

「襲ってくる様子はなさそうだし、ささっと封印を。」

じゃ、レイジングハート！え？」

デバイスを起動させようとした時、ネコに黄色い魔力弾が当たった。

『にやあああああ！』

誰だ！？

魔力弾が飛んできた方を向くと、電線の上に金髪の女の子が斧みたいなデバイスを持って立っていた。

「バルディッシュ、フォトンランサー・電撃」

女の子がそう言うと、デバイスの先端から大量の魔力弾がネコを襲い、着弾した。

「ま、魔法の光。そんな……」

「レイジングハート、お願い！」

「リテイス、セットアップ」

バリアジャケットを身に纏い、攻撃をやめさせたかったけど……。

「何でまたスカート……」

視界が滲んできた。なのははネコの背に乗っかって攻撃を防いでる。仕方ない。今は我慢しよう。

「魔導師？」

女の子が疑問の声を上げながら今度は猫の足を狙って攻撃した。

ネコはバランスを崩して倒れ、なのははギリギリ飛行魔法で離脱した。

なのははレイジングハートを構える。俺はと言うと……。

「あんたの相手はあたしだよ！」

犬耳を生やしている女性に戦いを挑まれた。

「穿て、フリーズランサー！」

「無駄だよ！」

女性はそれを避けて俺に殴りかかってくる。

「アイス・ソルジャー」

女性が殴り飛ばすと共に、音を立てて崩れ落ちる氷。おれ

「なっ!？」

「二つ聞きたい事がある」

「いつの間に後ろに!？」

「答えたく無いならそれでもいい。お前たちがジュエルシードを集める理由は？」

「そんなの誰が言うか!!」

「じゃあ、次。あの女の子があんなに悲しい目をしてるのはなぜだ?」

「だから、誰があんたらなんか言うか!!」

「そうか……」

俺はあの目を知ってるから……どんな感情、思いを含んでるのか知ってるから。

「……俺は今日からお前達の仲間になる」

「な、何を言ってるんだい!？」

「あの目をしてる理由が知りたい。それと、助けたいから」

「意味がわからないんだけど」

「簡単に言うとうち紛れだ。大丈夫、裏切りはしない」

「彼女を裏切ってるじゃないか!」

「裏切ってるねえ。なのはとは友達だけど、仲間じゃない。覚悟もなしに自分の正義を貫く奴と力を振るう奴が大嫌いなんでね」

これは本当の事だ。友達だけど仲間ではない。

「お前らは、死ぬ覚悟と、死なない覚悟を持ってるか？」

矛盾してる質問。でも、その覚悟は力を持つ上で、戦いに身を投じる上で絶対に必要なもの。戦いはいつも死と隣り合わせ。何時死んでもおかしくない。だから死ぬ覚悟を。死ぬ覚悟があれば恐怖に負ける事無く、立ち向かう事ができる。これは実力差があまりない場合、勝利に繋がる事がある。確実に負けるってわかってる時は引く事も大事だけど。そして死なない覚悟。自分が死んで悲しむ存在が居る。それを知ってるからもてる覚悟。死ぬ覚悟は死なない覚悟に繋がる。やっぱり矛盾してるなあ……でも、これ以上上手く言えないからいいか。

「矛盾してないかい？」

「矛盾してるけど、いずれわかるさ。この二つの覚悟を持つ意味がとにかく!俺はお前らの仲間になる。異論は認めないからな」

今はこの覚悟を持ってなくてもいい。まずは彼女の悲しみの種を取り除かなきゃな。

リテイスを待機状態にする。

「リテイス、夜までお別れだ」

へはい。マスター」

「えーっと、犬女」

「私は狼だ！」

「そうなの？ まあいいや。俺の名前は月影凜。デバイスを預けとく。
今日の夜七時、海鳴公園で待ってるからな」

リテイスを狼女に渡してなのはの方を見る。ちょうど勝負が付いたみたいだ。

「さっさと行け」

「本当に持ってっていいんだね？」

「ああ」

なのはの様子を見に行くか。

「ユーノ」

「凜」

「なのはは気絶してるだけか？」

「うん」

「じゃ、運ぶか」

なのはを背負ってみんなの所に戻った。俺はそのまま気分が悪い

と言って帰った。

今は晩飯を作り終わって後片付けを済ました所。後は念話で伝えるだけ。

《詩織、蒼夜、なのは、ユーノ》

《何？／何だ？／どうかしたの？》

《今日から俺はあっち側につく。じゃあな》

念話を切って向こうからもかけて来れないようにする。魔力を感じできないようにして海鳴公園に向かった。約束の時間まであと二時間。眠い。

アルフ side

私は凜って名前の少女に言われたとおり、海鳴公園に来ただけど……。

「広いから探すのが大変だね」

フェイトには理由を話してきたから大丈夫。それにしてもどこに…居た。

「あんた、こんな所で寝てると風邪引くよ」

「…スウ…スウ…スウ…」

起きないね。このまま連れて行くしかないか。

「よつと」

フェイトより軽いね。

「フェイトくただいま」

「お帰り、アルフ。その子が例の？」

「そうだよ。公園に行ったら寝てたんだ」

「…んっ…ここは？」

「目が覚めたかい」

「え…っと、狼女？」

そういや、名前をまだ教えてなかったね。

「私はフェイト・テストロッサ」

「あたしはフェイトの使い魔のアルフ」

「俺は月影凜。アルフ、そろそろ下ろしてくれない？ 恥ずかしい…」

忘れてた。

「あんた、女の子が俺って言うのは変だと思うけど」

「俺は男だ」

「冗談…だよな？」

「冗談じゃないよ」

「だ、だって…バリアジャケットがスカートだったじゃないか」

「あれは最初から中に入ってたデータだ。前にズボンに切り替えたはずなんだけど、もしかしたらたまになるのかもな」

これで男！？ 本当に！！？ 信じられない。否、信じたくない！！

『嘘だ!!』

「久しぶりに聞いたな。まあ、そんな事は置いといて：フエイト」

「は、はい」

「今日からよろしくな。デバイスは暫くの間預かっててくれ。その方が安心できるだろ。話はさせてくれよ」

「あ、ああ……」

変わった仲間が増えたな。

5話（後書き）

凜はどんどん子どもっぽくなっています。
でもそれは日常の時だけなのです。

コラボとかもできればしてみたいです。
うまくやれる自身はないですけど。
あと、これからは三人称で書いていきます。
その方が書きやすいので。

感想質問誤字脱字報告待ってます。

6話（前書き）

いやあ……今までで一番長いです。

これは本編での5話ですね。

3話の内用はアニメと全く同じなのでやめました。

6話

午前六時。

一つのマンションの屋上で銀髪の少年、凜と金髪の少女、フェイトが模擬戦をしていた。

「アークセイバー！」

「アイス・シエル」

フェイトはデバイスを起動させているが凜は起動させていない。理由は信用してもらうためにデバイスを預けているからだ。

鎌の状態のバルディッシュから、魔力でできている刃が凜目掛けて飛ぶ。それを凜は全方位防御の氷の球体を作り、身を守る。

「碎けろ」

一言呟くと、氷の球体は碎け散り、小さな破片となって宙を舞う。

「穿て、フリーズランサー！」

「くっ！」

〈Protection〉

放たれた無数の氷の破片をフェイトは障壁を張って防ぐ。全ての攻撃を防ぎきった彼女が見たのは冷気の塊。

「ブリザードバスター！」

「サンダーレイジ！」

黄色い砲撃と凍てつく白い砲撃。白い砲撃は暫しの拮抗の後、黄

色い砲撃を飲み込み、フェイトを襲う。

「きゃあああああああ！」

「ふう…まだやるか？」

「うん」

「はあ…癒しの術・クラーレ」

ダメージと疲労を回復する魔法を自身とフェイトに使う。

「絶対に一撃当てる！」

「なら…氷剣・ラグラス」

氷の剣を作り、下段に構える。

〈S o n i c m o v e〉

「カンムル神速」

刹那、二人は駆ける。音速の世界を。ぶつかる度に火花が散る。

「凍りつけ」

フェイトを囲むように、白い魔法陣が無数に現れる。フェイトは足を氷付けにされ、動けなくなった。

「終了」

凜の言葉と共に氷は砕け、剣も消える。

「今のは何？」

「術式トラップ。設置型バインドの応用版」

「二人とも、そこまでにしてご飯にしようよ」
「わかった。すぐに準備するね」

——ついこの間、遠くまでジュエルシードを探しに行ったら一つ、この町で発動した。急いで戻った時には封印も終わってて、手に入れる事はできなかった。凜はこれでいいって言ってた。ジュエルシードを取られたのに、何で？ やっぱり凜は敵なの？ ——

凜が朝食を作ってる間、フェイトは数日前の事を思い出し、考えていた。それはアルフも同じ。凜の考えてる事がよくわからない。

「よし。できたよ」

三人で朝食を食べてる間も、二人は考え事をしていた。信用していいのか、できるのか。それがわからなくて。

「明日は温泉の方にあるジュエルシードを取りに行く。白い魔導師も来るだろうから、戦って全部取れ」

「えっ!？」

凜の発言に二人の驚きの声が重なる。

「だから、あの魔導師と戦って勝って、全部奪えって言ったんだよ」
「本気で言ってるのかい!？」

「本気だ。フェイトの実力ならあいつに必ず勝つ。外野は俺とアルフで相手しときゃいい」

「信じて……いいの……?」

「まだ信用してもらってなかったんだ……」

信用してもらってなかった事に、この前あんな事言っただから当然か、と納得して苦笑する。

「デバイス無しで戦うつもりかい？」

「そのくらいのハンデがあっても、あの二人には負けないよ」

全力じゃなくても本気の模擬戦でダメージを一切負わなかった凜。三人の中で一番伸びるのが早い彼。運動神経は切れかけてるが……。

「今なんかも凄く失礼な言葉が聞こえたような」

「何も聞こえなかったけど」

「そう…明日の予定の時間まで訓練禁止。万全の状態で行かないとな」

「わかった」

翌日。凜はジュエルシードを一人で探していた。近くにあるのはわかっているが、正確な場所はまだわかっていなかった。ちなみにフェイトとアルフは温泉に入っている。

《凜、状況はどうだい？》

《大まかな場所はわかったけど、これ以上は発動しないと場所は分からないから、そっちと合流するよ》

《あいよ》

予約は最初から三人で入れてるから、問題はない。

「カンムル
神速」

凜の姿は消え、散っていた木の葉が通り道を表すように舞った。

「フェイト」

「凜！」

旅館に着いた凜は先にフェイトが居る部屋に行った。

「アルフは？」

「温泉入りに行った」

「フェイトは入ったの？」

「うん」

「それじゃ俺も入りに行くね。後、魔力は念話以外で消費しない事。いいね」

「わかった」

凜が部屋を出ると同時に身長は150cmくらい、髪の色は黒になった。それでも見た目が男っぽくなる事はないが、大人びた雰囲気はある。

「人に言っというて使うんだ……」

「仕方ないだろ。知り合いが多いんだから」

彼は苦笑しながら言い訳をし、温泉に入りに行った。

「君かね？家の子をあれしてくれちゃってるのは？」

「え？えっ？」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンちょに見えるんだけどなあ」

「何やってんだよ……」

「なのは。お知り合い？」

「ううん」

「この子、知らないようですが、どなたですか？」

「お姉ちゃん、何してるの？《アルフ、俺だ。俺の話しにあわせてくれ。名前は呼ばないように》」

《わかった》

途中でなのはたちともめているアルフを見つけ、声を掛ける。

「君たち、ごめんね。お姉ちゃん少し酔っ払ってるみたいだから、許してね」

「ごめんごめん。人違いだったかな。知ってる子にちょっと似てたからさあ」

「何だ。そうだったんですか」

「本当にごめんね」

「いえ、いいですよ」

「あはは、可愛いフェレットだねえ。よしよし、なでなで。《今のところは、挨拶だけね。忠告しておくよ。子どもはいい子にして、お家で遊んでなさいね。おいたが過ぎると、ガブツと行くよ》」

「ほら、お姉ちゃん行こ。《ユーノ：君には失望したよ》」

《え！？凜！！？》

「さうて、もう一つ風呂行ってこようっと」

その場を去っていく途中、後ろからアリサの不機嫌な声が聞こえていた。そんな声を無視して二人は途中で男湯と女湯に別れた。

「士郎さん。今日は誘っていただき、ありがとうございます」

「いや、お礼なんていいよ。できれば凧くんも来てほしかったけどね」

（目の前に居ます…）

何て士郎と恭也、蒼夜に言えない凧は無言で体を洗い出す。

「君、ここは男湯だよ」

「これでも男なんですけど」

「そ、そうか…すまない」

「いえ、慣れてますから」

体を洗い終わり、湯船に浸かる。

「君、何か武術をやってるのか？」

不意に士郎がそんな事を聞く。

「剣を少し…」

「上がったら一戦やらないか？」

恭也との対戦。少し悩み、一つの疑問が浮かんだ。

「ここで？そんな施設あるんですか？」

「すぐその林でやればいい」

「わかりました。引き受けます」

思わない展開になったけど後悔はしてない。むしろ実力を確かめるのにちょうどいい。

「士郎さん。どうしたんですか？」

「彼と会った事がある気がしてな。気のせいかな？」

士郎の発言を聞いて蒼夜は変身魔法を使用した凜の姿をジッと見る。その視線に気付いたのか凜は蒼夜のほうを見て怪訝そうな顔になる。

「何か付いてる？」

「あ、いや、どっかで会った事あるような気がして」

「僕は君に初めて会うけど」

まだばれてない事に安堵するが、ここに居るのは気配に敏感な高町士郎とその息子、恭也。気は抜けない。

「僕は水無月蓮。^{みなづきれん}あなた方は？」

「高町士郎だ。よろしくな、連くん」

「高町恭也だ」

「えっと…二人は兄弟で？」

「いや、親子だ」

「ええ！？とても子持ちの親には見えません」

「はっはっは。初めて会う人にはよく言われるよ」

「俺は花咲蒼夜」

「皆さんよろしく」

知っていても聞く。あくまで一度も会った事がないように。今の喋り方と見た目だと僕っ娘にしか見えない。

「それじゃあ、先に上がって待ってます」

「いや、俺たちも行こう。父さん、審判お願い」

「わかった」

「それじゃ、俺は見学を」

旅館の浴衣じゃなく、動きやすい私服で林に向かう。

「得物はどれを使う？」

「それじゃ、これを」

手にしたのは普通の木刀。恭也は二本の小太刀。

「小太刀二刀御神流師範代・高町恭也对……そう言えば流派を聞いてなかったな」

「我流です。心を鍛えるためだけにやってるので」

「そうか。水無月蓮の試合を始める。礼」

『よろしく願います！』

「では、始め！」

開始と同時に凜は駆ける。スピードは神速を使った恭也の足元にも及ばない。恭也は自分の間合いに入ってくると同時に小太刀を振るう。だが、当たる直前で凜の姿が消失。三人の顔が驚きの表情に変わる。

「こっちですよ……」

恭也の後ろから聞こえた声。すぐさまもう一本の小太刀を振るうが、それも外れる。

「遅いです」

「ぐあっ!!」

「速い!」

予想外の強さに驚く二人。だが恭也も負けてない。

「なかなかやるじゃないか。なら、本気を出すでしょう」

「負け惜しみですか?」

「どう思われようが構わない」

二人は駆ける。異常な速さで。高速戦闘に慣れた蒼夜にすら捉えきれないスピード。凜は魔法を使ってるわけではない。脳が無意識に掛けてるリミッターを外しているのだ。凜の速度が更に上がり、恭也を押し始める。

「くっ!」

「制限解除。60%」

60%。それは人間が本来使っている力の倍。

「ラスト」

「ぐああああ!!」

恭也の体が吹き飛び、凜の勝利という形で終わった。

「ありがとうございました」

「君、強いな。それで我流か?」

「はい。心を鍛える事であり意思が揺らなくなりました。そのおかげか、普段、無意識に掛けてるリミッターを外せるように」

「それが強さの秘訣か?」

「いえ、これはその一つに過ぎませんよ。一番大切なのは決意、覚悟を持つ事。それがどんな物でも。《わかるだろ？ 蒼夜》」

「っ!？」

「それじゃ、先に戻ります」

一人、先に帰る凜。残された士郎と恭也も帰ろうとするが、蒼夜は驚きの表情を隠せず、その場に立ち尽くしていた。

「り……ん……？」

「どうした？ 蒼夜」

「あ、いや、何でもない」

見つけた。だけど、何でここに？

その疑問はすぐに明かされる事になる。

夜。林の中にて一つのジュエルシードが発動した。その側にはフエイトとアルフ、凜。

「うっはぁ。凄いねこりゃぁ。これがロストログアのパワーってやつ?」

「随分不完全で、不安定な状態だけどね」

「あんたのお母さんは何であんな物欲しがるんだろうね?」

「さぁ? わからないけど、理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと。バルディッシュ、起きて」

〈Yes, sir〉

金色の三角形の物体、バルディッシュから男性の機械音声が流れ、杖の形になる。

〈Sealing form. Set up〉

更に形が変わり、斧のような形状から金色の魔力の帯が四つ出る。

「封印するよ。アルフ、サポートして」

「いや、俺が封印する」

「できるのかい？」

「ああ…」

「……お願いするね」

「ブリザードバスター」

冷気の塊がジュエルシードに当たり、封印が完了する。

「来たか…」

凜の眩きの直後、なのはとユーノ、詩織、蒼夜がデバイスを起動させた状態で来た。

「あゝらあらあらあら。子どもはいい子でって言わなかったっけか？」

「それを…ジュエルシードをどうする気だ！」

「君たちに教えても何の意味もないよ。変身魔法解除」

「凜！」

「凜ちゃん！」

「それにさあ、あたし親切に言ったよね？ いい子でないと、ガブツと行くよって」

直後、アルフが人間形態から狼形態に変わる。

「やっぱりあいつ、あの子の使い魔だ！」

「使い魔？」

「そうさ。あたしはこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

「フェイト。なのはと戦え。ジュエルシード全てを掛けて。今のあいつになら勝てる。だけど、確りと決意を固めてるようだ。次はそうは行かない。チャンスは今回一度きり」

「わかった」

「邪魔者は…退かしますか」

「凜。デバイス」

フェイトから凜のデバイス、リテイスを受け取る。

「信用してもらったって事で、いいのかな？」

「うん」

「久しぶりの起動だね。行くよ、リテイス」

〈Stand by ready. Set up〉

リテイスから女性の機械音声が流れる。白と黒の光が凜を包み、バリアジャケットを身に纏って光の中から姿を現す。それh、今までの姿と違って一対の白い翼とは別に、一対の黒い翼が生えている。

「共鳴率、80%。蒼夜、詩織。俺が何でこっち側についたのか？それを知りたかったら俺に勝て。二人相手に構わない」

「後悔すんなよ」

「前までと同じだと思わないほうがいいよ」

「転移魔法、発動」

三人の足元に白と黒の魔法陣が現れ、どこかに消える。

「それじゃ、始めるか。氷剣・ラグラス。共鳴率、90、95、97：100%。限界突破、105%」

剣の形、いや、状態が変わる。ただの氷の塊が、不純物がなくなり、澄んだ池のように透明になる。

「何だ？その剣」

「氷剣・ラグラスの別の姿。暴風を纏え、風塵氷牙・ラグラス」

見えなくなった剣に風が唸りを上げ、纏わり付く。

「アルテミス。風塵バルテイスの弓を出して」

〈了解。風塵の弓、セット。能力解放。魔力変換資質、風〉

「風は使えなかったんじゃないかなかったっけ？」

「後付されたみたい。私も一昨日聞いたから」

「あの糞ジジイ！」

———久しぶりに聞いたが、やはり傷つくのお…シクシクシク———

「ぜってえ嘘だろうが———！！」

「誰に言っただ？それより、勝てば教えてくれんだな。俺たちを裏切って、あっちについた理由」

「ああ。勝てるんならな」

「私たちの事、なめてたら負けるよ」

凜と蒼夜が駆け、剣と拳がぶつかる。蒼夜能力の一つ、エクスプロード爆発による衝撃を風で相殺する。

「ゼピュロス・アロー！」

一瞬の隙を突き、風を纏った魔力の矢を放つ。大気を巻き込み、その姿を大きくしながら突き進む。

「アイス・シエル！」

全身防御の氷の球体がその進攻を阻むが、ゆっくりと罅が入り、撃ち碎かれる。

「チッ！カシムル神速」

少し掠ったものの、直撃を免れた。

「リテイス、飛ばしてくよ！」

〈了解、主〉

「制限解除。70%」

「クライス、炎刀・焰を！」

〈わかりました〉

凜の放つ威圧に臆する事無く、炎を纏う刀を構える。

「断罪の弓、アルティミスセット」

〈Stand by ready. Setup〉

左手に持っている風塵の弓とは別に、右手に半分が白、もう半分

が黒の羽の様なものが装飾されている弓が現れる。

両手に弓を持っては矢をつがえる事ができない。それは普通の戦いなら。魔法に必要なのはイメージ。それは正確に矢をつがえるイメージができれば、モーションを必要とせず、照準を合わせれば当たる事ができる。照準を必要としない方法もあるが。

「風矢、光矢、闇矢・乱射！」

「撃ち落とせ、フリーズランサー！」

風、光、闇でできた無数の矢を無数の小さな氷の槍が撃ち落とす。威力は互角だが、魔法の発動速度は凜の方が上だ。

「爆龍塵！」

「暴風壁！」

少し離れた所からの、爆発する竜の形をした炎の斬撃を、大きな唸り声を上げてる暴風が防ぐ。二対一なのに、その場から一度動いただけで、二人の攻撃を防ぎきっている。

「雷を纏え、雷塵氷牙・ラグラス。氷刃雷破連閃斬！」

風を消して雷を纏わせ、縦横無尽に駆ける。大まかな動きですれ違いざまに斬りつける。最初は防いでいたものの、徐々に押され、最後には二人して吹き飛ばされる。

「ぐああああああ！」

「きゃああああああああ！」

「悪いな。俺の勝ちだ」

その宣言と同時に、ピンク色の砲撃がフェイトに向かって放たれ

た。

「なのはの負けだな。じゃあな、二人とも」

「待て！理由だけでも話してくれ」

「まあ、いっか………あいつは、昔の俺と似たような目をしてた。これで十分だろ」

そう、言い放つと、デバイスを待機状態にして走り去る。

残された二人もデバイスを待機状態にして、なのはと合流するた
めに歩き出した。

「帰ろう。アルフ、凜」

「さっすがあたしのご主人様。じゃあね。おちびちゃん」

「待って！」

去ろうとしたフェイトをなのはが引き止める。

「できれば、私たちの前にもう現れないで。もし次があったら、今
度は止められないかもしれない」

「名前：あなたの名前は？」

「フェイト：フェイト・テストロッサ」

「あの…私は！」

なのはの言葉を最後まで聞かずに、フェイトは飛び去って行った。

「じゃあな。なのは、ユーノ」

「待って！」

「今度は俺かよ…」

「何で…何でそっちについたの？」

「じゃあ、はっきり言うか。お前が嫌いだからだ」

「え!？」

「手にした力を使って、誰かを守る。誰かの助けになる。それはいい。だけど、お前は覚悟を持ってるのか? 力を持つって事がどんな事なのか、それをわかってるのか? 力を持つって事は、一生戦いから逃れる事ができなくなるんだ。それがどんなに大変な事かわかるか? 今ならまだ間に合う。引き返せ。これ以上進めば戻れなくなるぞ。平穏な生活に」

彼らは神の気紛れによって平穏を失った。非現実は目の前で起れば現実。非日常は慣れれば日常。だけど平穏は? それは二つとは違う。人々は退屈な毎日に刺激を求める。だけど実際に刺激的な事が起こった。それがもし、次の日から平穏に戻るものならばいい。次の日じゃなくとも、本当に短い時間の間だけ、一時の悪夢なら。だが、そうじゃなく、一生続く悪夢だとしたら? それは今までのような穏やかな日々に戻れない。彼女が踏み込もうとしているのは一生続く悪夢。彼女の今までの暮らしだったら無縁の世界。まだ引き返すチャンスはある。だから問う。彼女の覚悟を、決意を。

「私には、それがどんなものかわからない。でも! ここまで来て、諦めるなんてできないの!」

「それがお前の答えか?」

「うん!」

「後悔するなよ。その決断をした事を。過去に戻る事なんてできないんだからな」

「わかってるの!」

その答えを聞いた凜は優しく微笑み、姿を消した。

とあるマンションの一室にて、凜は玄関で倒れていた。

〈マスター！マスター！〉

「凜！？どうしたの！？」

フェイトが問いかけるも、返答がない。顔は赤く、息は荒い。フェイトが凜の身体に触れる。

「アルフ！来て！凜の体が熱い！」

「すごい熱だね！早く病院に連れてかなきゃ！」

フェイトの呼び掛けで来たアルフが凜を病院に連れて行こうとする。だが、凜はアルフの服の裾を掴んで引き止める。

「病院は…いい……」

「そんな事言っちゃってあんた！凄い熱だよ！」

「いい、から…側に居て……」

アルフとフェイトは渋々と凜の願いを聞き、寝室に運ぶ。凜はそのまま眠りにつき、長い長い、悪夢にうなされる事になった。

6話（後書き）

次回は今まで少し触れてた凜の過去ですね。

どうなるかは楽しみに。

7話（前書き）

無眠で書いたので変な事になってるかもです。

7話

暗闇の中。彼は浮いていた。前後左右上下が全くわからない、重力の存在しない空間。ただ、フワフワと浮き続けている。

そんな彼に迫る光。否、彼が光に近づいているのかもしれない。彼はその光に吞まれ、目を開ける。

彼が見た光景は生前に住んでいた家。黒髪の幼い男の子。今の凜と少し似ている。否、過去の凜。

長い黒髪の中学生くらいの女の子。彼の姉。

黒髪の少し頬がこけてる髭を生やした三十代前半くらいの男性。そこに、彼の母親の姿はない。死んでいるわけでもなければ、離婚したわけでもない。病院に入院している。理由は、体が弱いのに凜を生んだからだ。命があるのが不思議なくらいだ。

姉は母の代わりになった。凜は幼くして迷惑をかけないように、大人しい子になった。姉の手伝いは何でもした。姉も彼にできる範囲でしか手伝いをお願いしなかった。父親は毎日、遅く帰ってきた。日に日に父親は痩せていった。彼が小学六年生になった頃、父親が死んだ。原因は過労。毎日、家族を養うのと、母親の入院費用を稼ぐために夜遅くまで働いていたから。彼は泣かなかった。否、泣けなかった。母親の居ない、寂しさや悲しさを押し殺していたら、その感情が麻痺してしまっただから。そんな彼を見て、姉は怒った。

『どうして無表情で居られるの！？お父さんが亡くなったのに！どうしてそんな顔ができるの！！？』

彼は答えに困った。自分でもわからないから。胸を締め付ける感覚が何なのか？それがわからなかったから。それは彼の心に唯一残っていた『悲しい』と言う感情だった。葬儀が終り、お墓に線香と花を添えた。その時、彼の目から涙が溢れた。彼はその時、やっと

気付いた。これが『悲しい』って感情だと。姉はそんな彼を優しく、抱きしめた。

次の日から、姉は通っていた高校を辞め、仕事を探し始めた。彼はその間に家事を覚えた。二週間後。漸く仕事が決まった。彼は父から貰っていた小遣いで就職祝いの腕時計を買った。全く使ってなかった小遣いは、かなりの金額になっていたからちゃんとした物をプレゼントした。姉は涙を流して喜んだ。

彼はその日から、様々な健康に関する本を読んだ。父親と同じ風になって欲しくなかったから。それから二年が経った。中学二年生になった彼は、就職祝いのプレゼントを買って以来使ってなかった小遣いで、姉の誕生日プレゼントを買った。当日に彼は姉に話しかけた。だけど、姉の反応は冷たいものだった。

『何？ お金が欲しいの？ いくら？』

『違うよ、お姉ちゃん……』

『だったら何？ 何なの？ いくらでも上げるから好きなもの買いなさいよ！！ 私ほ働きたくて働いてるんじゃないのに……友達と、同じようにおしゃれをしたいのに……何でこんな事に！！ あなたさえ……あなたさえ生まれてこなければ！！』

彼は後ろ手に隠していたプレゼントを落とし、家を飛び出した。涙が止まらなかった。彼が一番恐れていた、拒絶。彼が唯一頼れるのは姉だけだった。その姉に拒絶された彼は、どうすればいいのかわからなかった。胸が痛んだ。頭がボーっとし始めた。息がし辛くなった。過呼吸。徐々に苦しくなり、助けを求めようにも声が出ない。意識が遠退いていく。そんな彼に声を掛けたのが詩織と蒼夜だった。学校で何度か会ったけど、話した事はなかった。蒼夜はある医療マンガの知識を思い出し、ちょうど持っていたビニール袋を彼の口に押し当てた。ゆっくりと、落ち着いて息をするよう言われたとおりにやり、彼は助かった。詩織と蒼夜は彼に何があったのか聞

いた。凜はそれを誤魔化さないで話した。姉とは違う、安心する雰囲気を持つ二人に。

全ての説明が終わった時、姉が走ってやって来た。姉は彼に謝り、二人にお礼を言って凜と一緒に帰った。それから更に一年が経った。彼は高校受験をせず、就職先を探した。だが、どこも雇ってはくれなかった。彼は週に6日バイトを入れた。朝ごはんを作り、二人分の弁当を入れ、バイトから帰ってきたら夕飯の準備。終わったらまたバイト。そうして少しずつ、姉を楽させた。詩織と蒼夜とは何度も会って、遊んだりもした。それは週に一回の休みの日だけ。そしてこの間。彼は神の気紛れによって殺され、そして、転生した。彼の唯一の心残りは、姉に『ありがとう』と伝えられなかった事。

だけど、今は別の事に集中している。それは、フェイト・テストロッサを助ける事。彼が味わった家族に、唯一頼れる家族に拒絶されるという恐怖。フェイトはその事を恐れている。だから彼は裏切った。大切な親友を、この世界に来てできた初めての友達を。彼は戦う。儂い光を強い輝きに変えるために、罪を負って。白き翼は希望。黒き翼は絶望。希望を与えて、絶望を飲み込む、破滅の天使として。

「いい加減にきなさいよ！」

アリサの怒鳴り声が教室に響く。怒っている相手はなのは。周りに居た子たちが驚き、アリサたちの方を見る。

「こないだから何話しても上の空でボーっとして！」

「ご、ごめんね。アリサちゃん」

「ごめんじゃない！ 私たちと話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！」

「行くよ。すずか」

「あ、アリサちゃん」

一人、教室を出て行くアリサ。すずかはどうするべきか悩んでいた。

「なのはちゃん」

「いいよ、すずかちゃん。今は、なのはが悪かったから」

「そんな事ないと思うけど…とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね」

「ごめんね」

詩織はそんな彼女たちの光景を見ているだけだった。下手に口出ししない。彼女たち一人一人が答えを出さなきゃいけないから。

「怒らせちゃったな。ごめんね。アリサちゃん」

その場に居ないのに、彼女は謝る。詩織はそんな彼女に呆れ、溜息をついた。

「アリサちゃん…アリサちゃん！ アリサちゃん！」

「何よ」

「何で怒ってるのか、何となくわかるけど、ダメだよ。あんまり怒っちゃ」

「だってムカつくわ。悩んでるの見え見えじゃない！ 迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない！！」

「二人とも、何があったんだ？」

二人に近づく蒼夜。話は詩織から聞いているが、考えは彼女と違う。確かに答えは一人一人で出さなきゃいけない。でも、ヒントくらいは与える。

二人は蒼夜になのはの事を話した。

「ふうん。ま、様子を見てたらいつかはこうなるんじゃないかと思つてたけどな」

「蒼夜は何か知ってるんでしょ。教えなさいよ」

「無理だな。それは本人の口から言い出さなきゃ意味がない。時期を待て。今言えるのはそれだけだ。それまでは、待っててやりな」

「蒼夜さんも、何か悩んでますか？」

「そりゃ、悩んでるさ。人間は唯一理性のある生き物。悩んでない人間なんて居ないんだよ」

「そ、それは…」

「現にお前たちも悩んでる。人間は一つ一つの行動で悩んだ末、答えを導き出す。それは他人に支えられてる時もあれば、一人で答えを出す時もある。悩みが一瞬で解決しても、すぐに別の悩みが生まれる。悩みがなくなる事は一生ない。たまに居るだろ？悩みがないのが悩みだって言う人」

「それって、矛盾してませんか？」

「矛盾してるけど、それも立派な悩み事だ。世界を見てみる。どれだけの多くの矛盾が存在してるか。この世は矛盾がなければ成り立たないんだ」

二人は蒼夜の言葉に感心する。もう、さっきまでの悩みが吹き飛んだようだ。

「だから、待ってろ。無理に悩みを聞く必要はない。たとえ話してくれなくても、彼女の心が晴れるまで待て。彼女の支えになれるの

は君たちだからな」

「はい！」

「フェイト」

「アルフ…」

フェイトたちの住んでいるマンション。寝室のベッドの上で規則正しい静かな寝息を立てる凜。その傍で様子を見ているフェイト。そんな二人の様子を見に、アルフが部屋に入る。

「凜。まだ起きないんだね」

「うん」

「あれからもう五日も目を覚まさないなんて、やっぱり病院に連れてった方がいいんじゃない？」

「凜は嫌がった。だから、連れてかない」

「そうかい。それよりフェイト、またご飯食べてない。ダメだよ食べなきゃ」

「少しだけ食べたよ」

そう言って起き上がるフェイト。その体には無数の傷。アルフはそれを見て暗い表情になる。

「そろそろ行こうか。次のジュエルシードの大まかな位置特定は済んでるし、これ以上母さんは待たせたくない」

「そりゃまあ、フェイトは私のご主人様で、私はフェイトの使い魔

だから、行こうって言われりゃ行くけどさあ…」

「それ、食べ終わってからでいいから」

フェイトがそう言いながら見たのはドッグフード。アルフはそれを慌ててテーブルの上に置く。

「そうじゃないよ。私はフェイトが心配なの。広域探索の魔法はかなりの体力使うのに、フェイトってば碌に食べないし休まないし…その傷だって軽くはないんだよ」

「平気だよ。私、強いから」

優しい微笑を浮かべながらフェイトは言う。手を組み、バルディッシュが嵌め込まれた漆黒のグローブが身に付けられる。右手を出し、掌に出された金色の魔力球は黒いマントに変わる。

「フェイト………」

心配そうな目で見つめるアルフを気にせず、マントを身に着ける。

「さあ、行こう。母さんが待ってるんだ」

夜。一つのビルの屋上に一人の女の子と一匹の狼が降り立つ。

「大体この辺りだと思うんだけど、大まかな位置しかわからないんだ」

「はあ：確かにこれだけごみごみしていると探すのも一苦勞だあね」
「ちよつと乱暴だけど、周辺に魔力流を撃ち込んで、強制発動させるよ」

「ああ、待った。それ、あたしがやる」

「大丈夫？結構疲れるよ」

「ふん。いったいこのあたしを誰の使い魔だと？」

「じゃあ、お願い」

「そんじゃ！」

アルフの毛が逆立ち、足元にオレンジ色の魔方陣が現れる。光は天に伸び、雲行きが怪しくなる。

「強制発動！見境無しだなーおい」

「そんな暢気な事言っでないで、行くよ！」

詩織と蒼夜が駆ける。町の住民を守るために。

「広域結界！間に合え！」

ユーノが大きな結界を張る。その間になのはは走りながらデバイスをセットアップさせる。

青い光の柱が現れる。それはジュエルシードが発動した証。

「見つけた」

「けど、あっちも近くに居るみたいだね」

徐々に結界の範囲が広がり、ジュエルシードとフェイトたちを中に閉じ込める。

「速く片付けよう。バルディッシュ」

〈Sealing form. Set up〉

バルディツシュの形状が変わる。フェイトとなのは、二人の封印が同時に施される。ジュエルシードの封印は終わったが、同等のエネルギーで封印されたのか、その場に浮き続ける。

そこに蒼夜と詩織も駆けつける。三対一。圧倒的にフェイトが不利だ。

「フェイトの邪魔はさせないよ。詩織、蒼夜」

再び、彼らに敵対する凜。白い翼はない。生えてるのは二対の漆黒の翼。右手に持っている氷剣・ラグラスは、禍々しい、黒い魔力を纏っている。デバイスであるリティスも、白いネックレスではなく、半分が黒に染まっている。

「行くよ。リティス」

〈……………〉

凜は呼び掛ける。だが、リティスから返事が帰ってくる事はない。彼が放つ威圧は、今までの比ではない。二人の頬を冷や汗が伝う。ニヤリと笑った凜。咄嗟に二人は左右に飛び退く。

刹那。二人がさっきまで居た場所を斬撃が駆け抜ける。非殺傷設定はされていない。今の彼は闇。純粋な闇の存在。

「フェイトの邪魔はさせないよ」

笑いながら言う凜。だが、本当に邪魔をさせないようにしているのだろうか？否、違う。その言葉は、今の彼になる前の心の言葉。今の彼はフェイトも、大切な親友をも傷つける闇。目の前に存在するものを攻撃するだけの闇。フェイトの姿も認識できないだろう。

「おいおい。これ、どうすりゃいいわけ？向こうは殺傷設定。絶対に一撃も当たらないで止めろってか？」

「止めるって言っても、全力を出して一撃掠ったくらいなんだよ！ほぼ不可能だよ！」

次々と繰り出される斬撃を躲しながら話す。

「消し飛ばせ…虚空・乱舞」

無数の斬撃が放たれる。完全に躲しきる事ができず、血が流れる。

「断罪の弓セット」
アルティミス

〈了解〉

断罪の弓が左手に現れる。右手には白と黒の矢を一本ずつ持っている。飛んでくる斬撃を避け、黒い矢を放つ。

「アイス・シエル」

氷の球体が黒い矢の進攻を阻む。だが、それも一瞬。球体は碎け、矢は凜の胸に刺さる。

「ぐあああああああああ！！」

「苦しいだろうけど、我慢して…ジャツジメント・アロー！」

白い矢が放たれ、黒い矢と同じ所に刺さる。黒い光が弾け、白い光が凜を覆う。光の中から姿を現した凜。右手に持っているラグラスには禍々しい黒い魔力が纏われておらず、黒く変色したりティスは元の白色になっている。

「…ここ、は……？」

「凜！」

「元に戻ったんだな」

「詩織、蒼夜。何で俺、外に居るんだ？ってか何でデバイスを起動させてるの？」

「何も覚えてないの？」

「うん」

「リテイスは？」

「ハッキリとはわかりませんが…マスターが起きたと思ったたら私を急に起動させて、そしたらだんだん闇に吞まれていく感覚が……」
「そう、か…」

彼らが状況を確認していると、暴発した魔力が吹き荒れる。それはジュエルシードから発せられたもの。

「フェイト！」

「なのは！」

三人が発生地を見ると、デバイ스에罅が入り、吹き飛ばされたフェイトとなのはの姿が、その間で膨大な魔力を放出し続けるジュエルシード。

「大丈夫？戻って、バルディッシュ」

〈Yes, sir〉

デバイスを待機状態にさせ、ジュエルシードに近づく。

「フェイト！」

両手で暴走をし続けるジュエルシールドを包み込んだ。溢れ出す魔力はフェイトの手を傷つける。フラフラしているが、確りとした足取りでフェイトに近づく凜。

「手、離せ」

「凜！」

無理矢理にでも、フェイトの手をジュエルシールドから引き剥がし、自分の両手で包み込む。足元に今までとは違う、白銀の魔方阵が浮かび上がる。手から吹き出す血を気にもとめず、押さえ続ける。ジュエルシールドから溢れる魔力は徐々に小さくなり、やがて暴走は止まった。それと同時に凜は意識を手放した。

「凜！」

フェイトが支え、アルフが飛び寄る。アルフはなのはたちを睨みつけ、凜をおぶってフェイトと共に飛び去った。

7話（後書き）

凜の暴走。原因は不明。

さて、一つの伏線の半分は回収しました。

そして別の伏線が……

いずれ明かされますよ。いろいろと。

8話

神界にある一つの建物。その中の一室で、三人を転生させた神が書類整理をしていた。枚数は机全体を埋め尽くすほど。目の前だけ仕事ができるようにスペースがある。

「流石にこの枚数はきついのお」

誰に言うでもなく呟く。そんな神の頭上には一つのモニター。それには凜の暴走状態が映っていた。

「転生させておよそ二ヶ月。いきなり暴走とは……やはり、この世界に転生させたのはまずかったかの」

モニターを消して腕を組む。暫く考えて一つの案が浮かんだ。

「否、まだ、この世界ならではの可能性がある。 “彼女” の周りに希望ひかりが集まる。その希望ひかりが “彼女” を助けてくれる事を信じるしかないの。

それじゃ、仕事を終わらせて準備をしますか」

異様なスピードで書類が片されていく。二時間も掛からないうちに全ての書類を片付け、席を立つ。そこにノック音が三回響く。

「神様ー、追加の書類でーす」

「もう、嫌じゃー!!!!!!」

追加の書類の量は先ほどの倍以上ある。逝ってきなさい♪

「字が違うじゃろ!!」

「誰にツツコンでるのですか？」

神界は今日も平和である。

ビルの屋上でフェイトは空を見上げていた。

「フェイト、大丈夫かい？」

「私は平気。でも、凜が…」

「俺がどうしたって？」

顔を下に向けたフェイトに掛けられた言葉。

「凜！」

「もう大丈夫なのかい？」

「ああ。心配掛けたな」

二人に優しい笑みを見せる。フェイトの目尻には涙が溜まっている。

「本当だよ。凜のバカ……」

フェイトが柔らかな笑みを浮かべると、小さな雫が頬を伝う。

「で、怪我を見せてみ。アルフの事だから応急処置しかできなかったんだろ」

「仕方ないじゃないか。治癒魔法が使えないんだから」

「それもそうだな。」

この程度だったらいつもの魔法でいいんだけど、今回は新しい魔法を使うか」

足元に白銀のミッド式の魔方陣が展開される。

「新しい魔法って？」

「見てれば分かるさ。」

リバース」

傷口に自身の手をかざす。淡い光が傷口を覆い、一瞬で治す。

「こっちの方が回復力はあるけど、消耗がクラーレよりあるのか」

「凜」

「何だ？」

「明日は母さんの所に行くけど、一緒に来る？」

「ああ。俺も会って話したいと思ってたんだ」

フェイトとアルフが首を傾げる。凜はそんな二人に、個人的な話だから——と言って家の中に戻っていく。

蒼夜と詩織は自宅の庭に結界を張って、デバイスを起動させていた。蒼夜は素手、詩織はアルテミスを手にとって、目を閉じている。

「共鳴率…85%、90%、96%。今の俺じゃこれが限界か。詩織は？」

「90、97、限界突破102、106%。やっと100突破」

「十分じゃねえか。それじゃ、モードを変えるぞ。炎刀・焰」

「バルテイス」

いつもの模擬戦ではなく、デバイスとの波長をモードごとに合わせる訓練をしていた。目標は全形態で100突破。

それから二十分後、携帯のアラーム音で訓練をやめ、朝食を摂って学校に行った。

同日、AM8..17。遠見市住宅街マンション屋上。

「お土産はこれでよしと」

フェイトの手にはケーキの箱。

朝早く起きて、凜と一緒に作ったもの。と言っても、凜は指示をしただけで、ほとんどはフェイトが作った。

「甘いお菓子か。こんなもの、あの人が喜ぶのかね」

「自分のために娘が作ってくれたら、親だったら誰だって喜ぶさ。親じゃなくても、な」

「次元転移、次元座標。 8 7 6 C 4 4 1 9 3 3 1 2 D 6 9 9
3 5 8 3 A 1 4 6 0 7 7 9 F 3 1 2 5」

三人を包み込むように、金色の魔方陣が展開される。

「開け、誘いの扉。時の庭園、テストロッサの主の下へ」

光が強まり、光が天まで昇る。

時の庭園の奥の部屋。

凜、フェイト、アルフはプレシアと向かい合うように立っていた。凜はプレシアに鋭い眼光で睨まれてるにもかかわらず、ニコニコしている。

「あなたは一体、誰なのかしら？」

「現地でフェイトの手伝いをしている月影凜と言います。ちなみに男です」

「それは冗談のつもりかしら？」

「いいえ、本気です。お願いですから、その疑いの眼差しだけはやめてください」

プレシアは凜を睨むのを止め、フェイトを見る。

「それでフェイト、ジュエルシードはいくつ集まったのかしら」

「九個です…」

「あれだけ時間があつたのにまだ半分もいってないの」

「あれだけってなあ…」

凜の纏っていた空気が変わった。

「広い世界に散らばった二十一個のジュエルシードを、この短期間で九個集めたって事はかなりすげえ事だぞ」

「あなたに言ったんじゃないわ。私はフェイトに言ったの。部外者が口出ししないでくれる」

「部外者って、まあいいや。それより、お土産のケーキです。フェイトの手作りの」

「フェイトの？」

「た、食べて、もらえないかな……」

恥ずかしそうにプレシアに言うフェイト。箱を開けてケーキを取り出す。プレートには『まだ9個しか集めてなくてごめんなさい』と書かれていた。

プレシアはそれを見て、無表情で箱にしまって近くに置く。その身体は僅かだが震えていた。

「後で食べるわ」

フェイトの顔が明るくなる。

「もう帰っていいわ。あなただけは残ってね」

凜を見てそう言う。フェイトとアルフが心配そうな顔をしているが、凜が微笑むとホッとした表情になる。

部屋を出てから次元転移を発動し、帰った。

二人だけとなった部屋の空気は重い。

「話って何だ？」

「あなたの目的は何かしら？」

「フェイトを拒絶するな」

「それは、どういう事かしら？」

「子が頼れるのは親だけなんだ。だから子は親に拒絶されるのを恐れる。拒絶された時、子の心は崩壊する。」

フェイトは特にそうだ。あいつの瞳にはいつも恐怖が渦巻いてる。寂しいって感情が渦巻いてる。それを消せるのはプレシア、母親であるあんただけだ」

俯いているプレシアの身体が震えている。顔を上げ、鋭い眼光で凜を睨む。

「あなたに何が分かるの…?」

「あんたが、本当はフェイトを愛してる事と、不治の病を患ってる」
「!?!」

「何でそれをもって顔してるな。一つ目はケーキの時に震えていたのと、本当に僅かで一瞬だけど、口元が笑っていた。」

二つ目は、魔力が安定してない。それと、身体がボロボロだしな。スフィアみたいにあまり魔力を消費しないのなら放てるけど、次元転移や次元を超えての魔法は負担が掛かりすぎて滅多に使えないんだろ」

「そこまで分かっているのなら話が早いわ。あなたに、あの子を任せていいかしら?」

凜はプレシアの発言に、盛大にため息を吐いた。

「あんた、何も分かってねえな」

「何ですって?」

「俺は言ったよな? フェイトの心の闇、恐怖と寂しいって感情を取り払えるのはあんただって。何で生きようとしらない。時間が無いのは分かる。だけど、僅かな時間でもできる事があるだろ? あいつと、最高の思い出を作ろうって気にならねえのかよ!?!」

「悪いけど、そんな事してる時間も無いの。私は犯罪者。大人しく投降したとして、牢獄から出る時にはすでに死んでるわ」

「そうか…これ以上話しても無駄なようだな…ケーキ、ちゃんと食ってやれよ」

足元に魔方陣を展開してその場から消える。

一人、残されたプレシアは、静かにケーキを食べる。彼女の頬を伝った涙の跡が、光を反射して輝いていた。

「ごめんなさい…フェイト……」

バスから降りた蒼夜、詩織、なのはは電柱の影にユーノがレイジングハートを首に掛けて舞って（誤字にあらず）いるのを見つけた。

「ユーノ：何してるんだ？」

「美由紀さんの料理を食べたら、何か気分がおかしくなってる」

「お姉ちゃん：料理しちゃったんだ……」

「そんなに料理下手なの？」

「耐性の無い人が台所に近づくと、三日間寝込むくらいなの」

ユーノはいつの間にか治ったのか、蒼夜、詩織と一緒に、何の冗談！？——という顔をしている。だが、なのはは本気だ。

「カエツタラO☆H A☆N A☆S H I ナノ……」

なのはの目からハイライトが消えた。三人はその顔を見て青ざめていた。

「そ、それよりユーノ、レイジングハートもう直ったの？」

「う、うん」

「レイジングハート直ったの！？よかった」

「Condition green.」

「また、一緒に頑張ってくれる？」

「All right, my master.」

「ありがとう」

「よかったな、レイジングハート」

「心配お掛けしました。クライス、アルテミス」

海鳴臨海公園の茂みの中、一つのジュエルシールドが淡く光っている。光はだんだんと強くなり、天に淡い青の光が伸びる。原生植物を取り込んだ。

ジュエルシールドの発動を感知した現地に居る魔導師達は、すぐに封印するために発動場所に移動する。

「封時結界！展開！！」

ユーノの足元に翡翠の魔方陣が現れ、周囲の空気が変わる。一部の景色が世界から切り離されたかのように。

原生植物を取り込んだジュエルシールドは大きくなり、低い唸り声を上げる。

なのははレイジングハートを異形に向け、蒼夜と詩織もそれぞれの得物を構える。

異形が四人に気を取られてる隙に、上空から金色の魔力弾と小さな氷の矢が降り注が、全て障壁を張って防ぐ。

「生意気にバリアまで張るのかい」

「今までのより強いね。それに、あの子も居る」

異形の根っこが大地を抉り上げ、下に居る四人に攻撃を仕掛ける。

「ユーノくん逃げて！！」

なのはが言う前に駆けていたユーノは茂みの中に逃げ込む。なのはは靴に淡い桃色の羽を生やして飛び上がる。蒼夜は剣を振り回して根を断ち、詩織は矢を放って貫く。

「リテイス、2nd mode」

へりよ〜か〜い〜

「ノリ軽いな〜」

「そういうあんたもね」

凜の手に刀身が銀で峰は白、鐔は蒼く、柄は黄色の長刀。

「極雷剣」

刀全体に紫電が纏われる。

「アークセイバー」

「隙は作る。そこに叩き込め」

「わかった」

「極光……」

纏う紫電の威力が上がり、その光は刃が反射して強く輝きだす。

「爆龍……」

「ゼピュロス……」

蒼夜の手に握られている刀の炎が大きくなる。足元には朱いミッド式の魔方阵。

詩織は橙色の魔方阵を展開し、風の矢をつがえる。

「雷斬！」

「風塵！」

「アロー！」

三人の攻撃を異形は障壁を張って防ぐが、いとも容易く破壊され

る。だが、出力が大きすぎたのか、化け物の周りで互いの力を相殺する。

「今だ、フェイト！なのは！」

「はあああああ！」

「ディバイン：バスター！」

二人の攻撃を再び障壁を張って防ぐ。なのはの砲撃の力に押し潰され、地面が窪む。

「貫け豪雷！」

〈サندانスマッシャー〉

上空から未だ砲撃が放たれているところに、フェイトの砲撃が追い討ちをかける。二方向からの砲撃を障壁で防ぐが、一方を防ぐので精一杯の力で防ぎきれはるはずも無い。障壁は砕け散り、異形は消滅した。二人はすぐに封印に取り掛かり、無事、ジュエルシードの封印に成功した。

だが、それで終わりじゃない。同等の力で封印に成功したのか、ジュエルシードは二人の中心で浮き続けている。

「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたい」

「うん。昨夜みたいな事になったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね」

「だけど、譲れないから」

〈Device form.〉

「私は、フェイトちゃんとお話をしたいだけなんだけど」

〈Device mode.〉

「私が勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら、お話、聞いてくれる」

暫く見詰め合っていた二人は同時に駆け、互いの得物を振るう。二人の間に光が溢れ、蒼いミッド式の転移魔方陣が展開される。

光の中から出てきた少年は、レイジングハートを素手で、バルデイッシュをデヴァイスで受け止める。

「ストップだ！」

ここでの先頭は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

みんな大好き弄られ役のKYくんだった。

8話（後書き）

そう言えば、なんでクロノはKYって呼ばれてるんだろ？

最善の行動をとっているに過ぎないのに。

さてさて、今回初めて神様の仕事の様子が出ましたね。

実はこの人は伏線を入れるのに重要なキャラなのですよ。

今回言ってた準備は二つの場面で行われます。

これ以上は言えないので。

それでは、また次回。

9 話（前書き）

遅くなりました！

gdgdです。

会話文だらけ。

でも動きがほとんど無い話だから大丈夫！

9話

神side

「神様！例の件ですが調べた結果、やはり“アレ”が関わっています」

そうか。言うかどうか、ずっと迷ったが……彼女にだけは真実を話しておく必要があるな。

「管理局から逃げ切ったら彼女をここへ呼んでくれ。説明はわしにする」

「はい！」

彼女は、この話を受け入れてくれるだろうか？わしの勝手なお願いを、聞いてくれるだろうか？もし、聞いてくれぬのならば、別の転生者を用意するだけ。世界のバランスを崩さないように、行動しにくれる存在を。

ハーレムとか、原作では敵の奴が本当はいい奴だったとか、世界の主要人物が死なないよう、少しは幸せな終わりに近づくような行動ならいいが、自分の私利私欲のために行動する奴、主要人物の心を壊すような行動をするやつだけは転生させないように慎重に選ばなくては。

神side out

フェイトとなのはは、決闘を止めたクロノと一緒に降りてきた。事情を聞こうとしたクロノに、上空からアルフが魔力弾を放つ。クロノとなのはは回避したが、

「フェイト、逃げるよ！」

「ジュエルシードは回収した。じゃあな」

「あ、待て!!」

「やだ♪」

凜はフェイトとアルフに転移魔法を掛ける。

「え?り、凜!??」

「ちょ、何やってんだいあんた!??」

「ちよつと遊んでから帰るね♪」

魔法を完全に発動し、フェイトとアルフだけ帰る事になった。

「待たなかったんじゃないのか?」

「待たないのは転移魔法の発動。じゃあなはあの二人に言ったものだから。」

「それじゃ、少し遊ぼうよ」

『へ?』

凜の発言にその場に居た全員が変な声を上げた。

「遊ぶって言っても、クロノが三十分以内に俺を捕まえると言うもの。捕まえる事ができたらジュエルシードを集めてる理由を話して

あげてもいいよ」

ま、君に俺を捕まえることなんてできないけどね。と小さく呟き、凜はデバイスを待機状態にした。

「ちなみに、クロノ以外は手を出しちゃいけないから。手を出した時点で即終了。砲撃放って逃げるから♪」

物騒な事を明るく言う凜に、全員の背筋が凍る。ちなみに比喻ではない。本当に凍っている。

『冷た！！／＼冷たい！！』

「じゃ、始めるよ。リテイス、時間計って」

へはい。制限時間三十分、鬼ごっこスタートです♪

「あ、一つ忘れてた。クロノは自由に魔法使っていないよ」

凜がそういった直後、リングバインドが凜を拘束しようとする。

だが、一瞬でその場から移動して躲す。

「少し頭を使わないと、俺を捕まえる事はできないよ」

誘導弾を放ってバインドを設置している所に追い込もうとするが、飛んでくる魔力弾の隙間を舞うように移動してギリギリで躲しきり、バインドが仕掛けられてる場所の直前で速度を上げ、発動前に駆け抜ける。

「リテイス、残り時間何分？」

「一分です」

同じ事を何度も繰り返し、とうとうそんな時間になった。同じと

言っても、クロノは設置バインドと魔力弾の数を増やし、逃げる範囲を狭めたはずなのだが、凜は未来を読んでるかのように逃げ回る。

「時間です、マスター」

「わかった。じゃあね、みんな。アイス・ソルジャー、ブレイク」

地面に降り立った瞬間、凜の身体が砕け、小さくなった氷の欠片が夕陽の光を反射して輝いていた。

「神様、連れてきました」

「ったく、何でいきなりこんな所に呼び出すんだよ！ビックリすんだろ！もう少し遊ぼうと思ったのに、三十分しか魔法を発動できなかったじゃねえか！！」

「そんな事より、大事な話があるんじゃない。君たちを殺した事について」

神の発言に、凜の表情が真剣なものに変わる。普通なら、どう言う事だ？と言う筈だ。だが、それを言わないのは少なからず、思い当たる節があるという事だろう。

「主を転生させた理由は大体察しがついておるんじゃない？」

「ああ。あの刀の事だろ」

「そうじゃ。アレは本来、主の生まれた世界にはあってはならんものじゃった。何の経緯か知らんが、それが主の世界に紛れ込んだ。それを手にした者は、己の心の闇に干渉し、増幅させる。さらに、アレには心があり、望んで行ってるわけじゃない。そこまでは知っているだろ？」

「ああ。何度か話したしな。それと、アレも多くの闇を吸いすぎた。

そろそろ心を失う。俺も危険だけだな」

「そうか。まあ、それだけだったら君だけを殺せばいい。そうしなかったのは何故か分かるか？」

暫く考えるが、答えが出ない。神の言うとおり、それだけだったら凜を殺せばいい。それに、転生させる必要も無いはずだ。

「理由は、主と言う存在じゃ」

「どういう事だ？」

「主はただの人間ではない。アレ、魔装具が主の中に居るのは関係ない。主は、神と人の子なんじゃよ」

「!!？」

「そして、神と人の子なのに、神力を宿さなかった存在。神と人の間に子を産んではならんのじゃが、主の父親はそれを犯した。何故産んではならんのか？理由は、人間の身体が耐えられないからじゃ。人間の母だけではなく、その子どもも。神力は、少しの量なら耐えられるんじゃが、それは人と人の間に生まれ、靈力の代わりに持つ場合だけじゃ。そういう人間と神の間じゃ、神力の量が違う。よって、神と人の間で子を産んではならんのじゃ」

「それは分かった。だけど、あの二人を殺した理由は何だ!？」

「あの二人も、特別な力の持ち主だからじゃ」

「え？」

「だが、殺すほどでもなかったのじゃが、先も言ったとおり、主の存在と、主らを転生させた世界が関わってる」

もったいぶっている神に苛ついてるのか、拳を強く握って震えている。

「さっさと見え……」

「そうじゃの。主らを転生させた世界には、主の持っているアレと

同じようなものが幾つか紛れ込んでいる。わしらで対処しようと考えたが、アレは神と天使の力を完全に無効化する。主が触れる前にも何とかしようとしたんじゃが、やはりダメじゃった。主が触れた時点でわしは諦めたんじゃ。自我を失うと。じゃが、違った。主は自分の心の闇に勝った。じゃが、過ぎた力を持った者は消さないとはいけなかった。

そこで思いついたんじゃ。今の世界には魔法が存在する。その中でも一握りの人間は惑星を破壊できるほどの力まで持っている。この世界だったら主を転生させる事ができるし、魔装具の破壊もお願いできる。ついでにあの二人も転生させたんじゃ。理由は主の存在。神と人との間の子というわけではない。主の保有してる力、アレによって手に入れた力じゃ。先も言ったとおり、神と天使の力を無効化する。詩織は調和の力を持っていた。蒼夜は膨大な霊力を保有していた。神と天使の力以外は無効化できない。

あの二人は主と一緒に今の世界に紛れ込んだ魔装具を破壊し、主が暴走した時に止めるためのストッパーじゃ」

「そうだったんだ。でも、霊力は不思議な力じゃないんじゃねえの？ さっきの話だと、霊力はみんなが持っているものだろ」

「人間が保有できる力の限界を超えてたんじゃ。今の世界の魔力と同じ計り方をすると、測定不能じゃ。ハッキリ言うと、世界最強の霊能力者と言える」

「マジでか!!!?」

「マジじゃ。」

あと、今、主の居る世界とは別、平行世界には何人もの転生者が居るんじゃが、ほとんどは神に力を与えられた者じゃ。その者達は皆、戦闘にはあまり関係ないが、神力を持っている。それは体中に流れてるわけで、殴ると言う動作だけでも神力を使ってるんじゃ。どんなに微力でもそれを含んでは魔装具には効果は無いんじゃ。ちなみに、意識しても神力だけで攻撃をする事はできないぞ。魔力球ならぬ神力球を作る事すらできない」

「待て、それじゃ俺達の中にも微力ながら神力が混じってるんじゃない?」

「そんなヘマはしとらんよ。ちゃんと神力が混じらないよう力を与えて転生させたわい。あと、転生じゃなくても神から力を貰ってれば神力が混じっておるから、時々外界から転生者とかがやってくるじやろうが、そやつらに手伝ってもらっても意味は無いぞ。」

あと、主の父親についてだが、人間としては死んだが、神としては生きて居るぞ」

「本当ですか!?!今、会えますか!?!?」

「無理じゃ。あやつは禁を破った。あと五年。牢獄から出る事はできない」

そうですか。と呟いて下を向く。そのまま凜は神に向かって駆け、顔を殴る。

「グホオッ!何するんじゃない!」

「それより、何で俺を男として転生させた?」

「え?そ、それは……」

「俺が男として生きてたのはお姉ちゃんを守るためだ!!俺とお姉ちゃんが一人立ちできるようになるまで!!この姿になったらずっと男で居なきゃいけないだろ!……!」

「いいじゃないか。見た目は可愛いんだから」

「よくねー!!今の俺が男子の告白に告白されてOKしてみろ!!!ゲイに見られるだろ!……!」

「今の発言はゲイに失礼じゃろ」

「うるさい!!私は女だったのに……もういい……自分を抑えるのはやめた。見た目は女の子なんだ。だったら、本来の口調で喋っても違和感無いわね?」

「ありません!!」

神は土下座をしながら大声で言った。それだけ今の凜は怖い。

「そういえばわしの名を言ってなかったの。わしは神話には一切出てない、無名の神、レフィットじゃ」

「レフィットね。二人にも伝えておくわ。あと、今教えてくれた、私たちを転生させた理由は二人に教えるの？」

「秘密にしておいてくれ。彼らが自分の持つ力を最大限、引き出せるようになったら教える」

「わかった。それじゃ、帰してくれる。フェイトとアルフが心配するから」

「はいはい。それじゃ行くぞ」

「落とさないでよ」

「わかっておるわい。またな」

「またね、レフィット」

別れの挨拶を済ませ、凜は帰っていった。

「レフィット様、一つ言い忘れてませんか？」

「ん……あ！」

「……まあ、いいじゃろ。アレは言っても言わなくてもいい事じゃ」

「それもそうですね。神力も、霊力も持たない透明な存在のわりに、気配が強かった原因はそこまで大きな問題じゃないですからね」

大問題だと思うが……まあ、彼らがそう言うのなら問題ないのだろう。

「それより、アレの準備はどうじゃ？」

「ほとんど終わってます」

「そうか……」

アレとは何か？それが明かされるのはまだ先の話。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

9 話（後書き）

やっと神の名前と凜が女だったって事が書けた。

本当は、凜の性別に関してはもうちょっと伸ばそうと思っていたんですけどね。

ええええ!!」

「君たちの間で、何か見解の相違でも？」

「えーと、な、なのは。僕たちが最初に出会った時って、この姿じゃ」

「違う違う！最初っからフェレットだったよー！」

「たぶん、ユーノがそう思っている理由は、俺たちが見た夢だろうな」

「夢？」

なのはが何かを思い出そうと必死になっている。

「も、もしかして、初めて魔法を使った日？」

「そうだよ」

「で、でも！夢だったらあった事にならないと思うの！」

「そうだな。だから、会った時に自分の素性をちゃんと話さなかったユーノが悪い！」

「ごめん、なのは」

ユーノが謝った事でその場は一旦、収まった。クロノが先を促すため、艦長であるリンディの所へ向かった。

「艦長、来てもらいました」

クロノに案内されてやって来た部屋は、艦内には不釣り合いな地球の日本でよく見る和室。座敷の上に赤い布を敷いて正座をしている緑髪の女性の服装は、和服ではなく仕事用の制服。それが余計に違和感を増幅させている。

「お疲れさま。まあ、四人ともどうぞどうぞ。楽にして」

蒼夜は胡坐、詩織は姿勢を少し崩して楽にしているが、なのはとユーノは緊張しているのか、きちんと正座をしている。

クロノがみんなに抹茶と羊羹を出す。それを合図に話が始まる。事の説明を終えて、リンディはユーノに話しかける。

「なるほど、そうですか。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「それで、僕が回収しようと」

ユーノの表情が暗くなる。それだけ、責任を感じているのだろう。これでは、いつ壊れてもおかしくない。蒼夜はそんな事を考えていた。

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

クロノの発言に、余計表情が暗くなる。

「あの、ロスとログアってなんなんですか？」

「ああ：異質世界の遺産。って言っても分かんないわね。えっと、次元空間の中には、いくつもの世界があるの。それぞれに生まれて育っていく世界。」

その中に、極稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎてしまったそれらが、自分達の世界を滅ぼしてしまって、その後に取り残された、失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称して、ロストログアと言う。

使用法は不明だが、使いようによっては世界どころか、次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つこともある、危険な技術」

「然る^{しか}べき手続きを持って、然るべき場所に保管されていなければいけない代物。」

あなたたちが探しているロストログア：ジュエルシードは、次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

「だったら何故、もっと早く来なかった」

今まで黙って聞いていた蒼夜が言葉を発する。その言葉には、僅かに怒りが含まれている。

「前になのはとフェイトが戦っている時、次元震が起きた。手前^{てめえ}らはそれが起きなきゃ動かねえのかよ」

蒼夜の身体から、魔力とは別のエネルギーが溢れ出す。

「ジュエルシードが地球の海鳴市付近に散らばったのは、次元船が事故にあったから。その時、被害連絡があったと思うけど」

「発掘者であるユーノはジュエルシードを回収しようと、海鳴に転移して来た。クロノもそれぐらいの事、出来たんじゃねえの？艦長であるあんたが命令すれば」

「悪いが、被害連絡が行くのは時空管理局本部」

「その本部から私たちは何の連絡も受けてないわ。この件に気付いたのは、次元震が起きた時、たまたま近くを通りかかったからにすぎないの」

リンディ達は嘘をついていない。そう思った蒼夜は、力を抑える。だが、完全には抑えず、まだ少し警戒している状態だ。

「もし、あんたらがこの件の指揮を取るんだったら、俺は手伝わせもらうぞ」

「私も」

「わ、私も！」

「僕も！」

「って事で、全員手伝うから。俺らの力はあるたらにとってかなり役立つはずだ。なのはや詩織、俺の魔力量とユーノの補助技術はな」
「考えたわね。いいでしょう。そのかわり、こちらの指示には従ってもらいますよ」

「母さ、艦長！」

勤務時間外では艦長ではなく母さんと呼んでる所為か、驚いた時には勤務時間でも母さんと言いそうになるらしい。

「お前、俺らと年あんま変わんないだろ？ だったら無理して艦長って言う必要ないんじゃないかねえの」

「僕はこれでも十四歳だ。それと、年齢には関係なく、こういう仕事はちゃんと階級で呼ばなくちゃいけないんだ」

「めんどくさいんだね」

「それじゃあ、ご家族に説明しないといけないでしょうから後日、再び話しましょ」

リンディはそう言った後、抹茶の中に角砂糖を入れる。それを始めて見る蒼夜達は、驚いていた。

「俺と詩織に親はいない」

「だからここに残ります」

「わかりました」

「君たち、元の場所まで送っていこう」

「ありがとうございます」

なのはとユーノが帰った後、蒼夜と詩織は艦長と話していた。

「何故、私たちに協力してくれるのかしら？あなたたちからは組織を信用していないように感じるのだけれど」

「組織自体は信用してない」

「だけど、あなたたちは信用するに値する人物だと思いましたから。それに……」

「この事件、俺たち全員でも対処できるかわからないほど、危険なものが関わってる気がするんだ」

蒼夜の言っている全員とは、アーススタッフを含め、なのはとユーノ、凜、フェイト、自分たち二人のことだ。

凜も能力面ではチートだ。それは蒼夜と詩織もそうだ。凜は出生の秘密と内に眠る闇。蒼夜は人の器を越えた霊力の量。先の話し合いのときに蒼夜の身体から溢れたエネルギーは霊力だ。そして、詩織の持つ調和の力と凜とは対照的な力。神秘的なものだが、神力を含まない力。この力は奥深くに眠っているため、本人はおろか神でさえ気付いていない。

「フェイト、アルフ、ただいま」

「凜！」

「無事でよかった」

アルフは急に目の前に現れた凜に驚き、フェイトはとても心配してたのか、目に涙が溜まっている。

「心配かけてごめんね」

「ほんとだよ。も〜」

フェイトはついに涙を堪えることが出来なくなり、凜に抱きつい

て泣いた。

時の庭園の隠された部屋に置いてある生体ポッド。その中にはフェイトと瓜二つの少女が糸纏わぬ身で入っている。

部屋の入り口が開く。入ってきたのはプレシア。ポッドに近づき、思いつめた表情で口を開く。

「アリシア、ごめんね。妹が欲しいってあなたのお願い、忘れてたわ。フェイトに、とても酷い事をしてしまった。でも、今からじゃ間に合わない。私の身体はもう……」

プレシアは静かに涙を流す。自身の身体と、アリシアの身体から溢れている紅い霧に気付かずに。アリシアの心臓が僅かに動いてることも知らずに……。

10話（後書き）

無印もついに終盤。

あと5，6話で無印は終了します。

11話（前書き）

思考モードと脳内会話が繰り返されます♪

ギャグ苦手だな～

11話

蒼夜たちがアースラでジュエルシードの回収を手伝い始めてから十日が経った。残り十一個となったジュエルシードを五つ見つけ、内二つは凜たちが手に入れた。

ジュエルシードの保有数は、なのはたちが三つ、フェイトたちが十二個となった。残り六つのジュエルシードはアースラスタッフ、フェイトたち共に海中と予測。

先に動いたフェイト、凜、アルフは海上に移動し、強制発動させるためにフェイトが海に電気の魔力流を叩き込む。発動したジュエルシードは、海水を自身の力として扱い、三人を襲う。フェイトは魔力をほとんど使い果たし、ジュエルシードを封印する事が出来ない。アルフはサポートと戦闘専門のため。凜は苦しそうな表情で、避けることに精一杯。

——闇を気にしすぎだ、凜！

「抑え込まなくちゃ、飲まれてみんなを傷つけちゃう……！」

——気にしてたら意味が無い。力を完全に抑え込むんじゃない、僅かに放出して、自分のものにするんだ。

「それって、滅茶苦茶危険な賭けだぞ、ゼブル」

ゼブル…凜の心の闇を増幅させる魔装具・破滅デスベアのもう一つの名前。

——やるしかないだろう。どちらにしろ、神に頼まれた事を成し遂げるには、その力を使うほか無い。

「ふう……行くよ」

目を閉じて少しの間考え、己の闇を少し解放する。凜の身体から溢れる黒い霧は剣の形に成り、凜の右手に収まる。

「漆風・ゼブル、共鳴率70%……蒼夜たちが来るまで持ち堪えるよ」

自身に迫ってくる竜巻に向かって漆黒の剣を振るう。竜巻は簡単に切れたが、すぐに繋がり、凜を襲う。

「やっぱり固形じゃないものは斬っても意味無いか」

——封印はしないのか？

「封印は得意じゃないの。それに、今度は力を制御するので精一杯」

剣の腹を竜巻に向けて攻撃を防ぎ、斬撃がダメなら打撃と、守りの姿勢から剣を振り抜く。竜巻を跳ね返し、そのままの勢いで身を反転、背後から迫っている竜巻を弾き、自身を黒い球体で包み込む。

「ハア…ハア…ハア…ハア…シャドウ・スパイク……」

黒い球体から巨大な針が飛び出し、竜巻を貫く。

「凍てつけ……」

竜巻がどんどん凍りつく。だが、負けじと竜巻の力も増し、互いの力が拮抗している。

「フェイトちゃん！凜ちゃん！」

「凜！！」

アースラのブリッジに、慌ててなのは、蒼夜、詩織が入る。

「あの、私たち急いで現場に！」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

クロノの発言に、なのはは驚愕する。それもそのはず。なのはは魔法を覚えたばかりの小学生。組織の事情なんて知らない。だから、クロノの発言に対しての反応は正しい。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも…！」

「今のうちに、捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示に、スタッフは準備を進める。なのははクロノの冷血な判断に戸惑う。

「それが、手前ら組織の最善の手か？」

「そうだ。僕たちはいつでも最善の策を練らなくちゃならない」

「それはわかるよ。どの世界でも、組織は全部そうだから。でも…」

「俺たちには関係ない。俺たちが協力してるのは、自分の守りたいものがあるから」

「全く関係ないってわけではないけど、私たちは自分の道を行くだけ」

「どうしても止めたいなら……」

「俺たちを全力で止めてみる／私たちを全力で止めてみなさい」

クロノの動きが固まる。蒼夜と詩織から放たれる威圧が、今まで感じたことがないほどに強力で、今まで感じたことが無いほどに、底の見えない恐怖を二人に抱いていた。

「なのは、ユーノ、行くぞ」

『はい!』

四人が転移するのを、誰も止める事はできなかった。

海上の高い所に転移した四人は、落ちていく速度を気にせずにデバイスを展開し始める。

「風は空に、星は天に…輝く光はこの腕に! 不屈の心はこの胸に!」

『闇は心に、光は大地に』

『燃え盛る焰はこの腕に』

『清らかな水はこの腕に』

『友の誓いはこの胸に!!』

『レイジングハート!／クライス!／アルテミス!』

『セットアップ!!』

『Stand by ready, set up』

デバイスを起動し終わった三人と、バリアジャケットを展開したユーノは薄暗い雲を貫き、降り注ぐ光を受けてフェイトたちの前に現れる。

「フエイトの、凜の…邪魔をするなー！」

勘違いしたアルフは、なのはたちに攻撃を仕掛けるが、ユーノが障壁を張って防ぐ。

「僕たちは戦いに来たんじゃない！」

《バカな！ 何をやってるんだ、君達は！！》

《命令無視は後で謝ります！だけど、ほっとけないの！！》

《命令無視は後で謝るし、説教は聞き流す！だけど……》

《もう後悔はしたくないの！！ あなたも同じでしょ！ もし、あなたが私たちと同じ立場だったらどうする！？ 自滅するのを待ってから行動するの！！？》

《くっ……いや、違う。おそらく、君たちと同じ行動を取る》

クロノも好きでその選択を取っているわけではない。組織の一員として、自分一人の我が儘でみんなを振り回すわけにはいかないからしているだけだ。

《ってか説教を聞き流すな！！》

遅れて蒼夜の発言に気がついたクロノが念話で叫んだが、二人は即念話を一方的に切った。

「凜！大丈夫か！？」

「ハア…ハア…来るのが遅すぎるよ………」

「一応無事みたいでよかった」

二人は安堵の息を吐くが、そう落ち着いてもいられない。二人に竜巻が迫る。

「龍神煌炎舞！」

「ホーリーランス！」

蒼夜は刀に炎を纏わせ、竜巻を何度も叩き飛ばして防ぎ、詩織は光の槍を放って打ち消す。だが、海上でこれらの行動は無意味。水が無限に存在するこの場では、蒸発しようと打ち消そうとすぐに復活する。

「フェイトちゃん！」

なのはは途中、竜巻に巻き込まれそうになりながらも、フェイトの傍に行く。

「まずはジュエルシードを停止させないと、不味いことになる！だから今は、封印のサポートを！」

ユーノの前に展開された翡翠の魔方陣から同色の鎖が六本現れ、竜巻を一つ一つ締め上げる。アルフはそれを見て、どうするべきか悩む。

もし、このまま封印したら、管理局にジュエルシードを奪われるかもしれない。でも、彼女らの助けがなければ全て封印する事ができない。

悩んでいるうちに、なのははフェイトのもとに行き、説得を始める。

「手伝って、ジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートから桃色の光が出て、バルディッシュに入っていく。同時に、切れかかっていたフェイトの魔力が回復し、なのはの魔力が減った。

〈Power charge〉

〈Supplying complete〉

「二人できっちり半分こ!」

竜巻の力が強まり、ユーノのチェインバインドが壊されそうにな
っているところに、背後からオレンジ色の鎖が竜巻を押さえ込む。
更に黒、朱、橙色の鎖が竜巻の動きを完全に封じる。

「みんなが止めてくれてる! だから、今のうち! 二人でせーので、
一気に封印!!」

〈Shooting mode〉

レイジングハートの形状が変わり、なのはは更に高い所へと移動
する。途中襲ってくる蒼い魔力で出来た雷のようなものを避け、や
がて目的の高さまで飛び上がったなのははピンク色の魔方陣を展開
してその上に降り立ち、フェイトを見る。

〈Sealing form, set up〉

「バルディッシュユ:??」

勝手に形状を変えたバルディッシュに驚き、声を掛ける。答えは
しないが、何を言いたいのかわかったフェイトはなのはを見た。な
のははフェイトにウインクをし、杖を高く上げる。

「デイベインバスター、フルパワー。行けるね?」

〈All right, my master〉

なのはの足元に展開された魔方陣が大きくなる。フェイトは無言
で金色の魔方陣を展開し、封印の準備をする。辺りには雷が落ち、
轟音を響かせている。

「せーのっ！」

「サッダー……！」

「ディバイン……！」

一際大きな雷がフェイトの側に落ち、なのはの前には光が集まってい

「レイジ……！」

「バスター……！」

二人の特大の砲撃がジュエルシードに向けて放たれる。あまりにも強大な力は、沖に居たにもかかわらず海岸の岩場を削る。

エイミイの前にあるモニターに映し出されているジュエルシードの状況。六個全ての周りに枠が出来、封印された事を知らせる。

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」

モニターの情報を、クロノとリンディに伝える。

「な、何てでたらめな……！」

「でも凄いわ……！」

現場の状況を見ていたスタッフ全員は、驚きのあまり口が開きっぱなしだった。

荒れていた海は元の穏やかなものになる。なのはとフェイトの前に海中から青い光が伸び、ジュエルシードが浮かび上がる。なのはとフェイトはそれを見つめたまま動かない。

なのははその間ずっと考え、やっと見つかった自分の気持ちを口にする。

「友達に、なりたいんだ…」

フェイトはその言葉に目を大きく見開く。今まで言われたことがなかった言葉。凜は友達ではなく仲間、協力者。

二人が無言のままジュエルシードをはさんで見つめ合っているのを、離れた所でアルフ達は見ている。

そんな時、アースラではアラート音が鳴り響いていた。

「次元干渉！？ 別次元から本艦、及び戦闘区域にて、魔力攻撃来ます！！ あ、あと六秒！！」

「な！？」

ユーノが天井を見る。直後、紫電がアースラに直撃する。同時になのはたちの側にも雷が落ちる。

「母さん…！！」

雷は一回ではなく、複数箇所に落ちている。その一つがフェイトに当たり掛けた時、凜がフェイトを突き飛ばす。紫電は容赦なく凜を遅い、体力を奪っていく。

『凜！！』

「凜ちゃん！！」

悲鳴を上げる事無く耐え切った凜はふらふらと危なげに飛びながら空を睨みつける。

――何も、わかってないんだ……

「ばかやろお……」

意識を失い、海へと真っ逆様に落ちていく。フェイトが急いで支え、アルフは空を睨んでからジュエルシードを取りに行くが、転移して来たクロノに邪魔をされる。

「邪魔を…するなー!!」

至近距離で魔力弾を放ち、クロノを吹き飛ばしてジュエルシードを確認する。だが、六個あったはずのジュエルシードは三つになっていた。クロノを見ると指の間に三つはさんで持っている。クロノはそれを自身のデバイスであるS2Uにしまう。

「うあああああああ!!!!」

アルフは海面に魔力弾を叩き込み、視界を塞ぐ。そのままジュエルシードを取り、フェイトと凜と一緒に転移して時の庭園へ向かった。

アースラに戻ってきたのはとユーノ、蒼夜、詩織はリンディの説教を受けていた。なのはとユーノはしっかり聞いているが、蒼夜と詩織は考え事をしていた。

「二人は聞いているのかしら？」

途中で気付いたリンディは、二人に声を掛ける。だが、返答はない。

〈マスター〉

クライスとアルテミスが呼びかけても返事はない。

――凜が使ってたあの力、殺傷設定で攻撃してきた時と同じ感じがした。

――あの力を神が与えるとは思えない。たぶん、転生する前か後に手に入れた力。

――もし前だったら、神は気付いて何もしなかったのか？ それとも出来なかったのか？

――蒼夜と私の力は前からあるもの。それは私と蒼夜、凜の秘密。

――それをふまえると、転生前からあるが何もしなかった可能性が出てくる。

――あの力を私たちと別行動を始めてから手に入れたとしたら、この短期間であれをコントロールできるとは思えない。

――俺らを転生させたのは気まぐれじゃなかったのか？

――それなら、私たちを転生させた事に納得がいく。

——強すぎる力を持ったものは、世界のバランスを崩す。

——魔法のある世界、しかもロストログアのような世界を滅ぼす可能性のある危険物があるこの世界なら……。

——俺たちの力も珍しくはあるけど問題無いってことか。

——でも、何でもっと早くに転生させなかったんだろう？

——なんで今更転生させたんだ？

《マスター!!》

デバイスたちによる念話で漸く思考の海から抜け出した二人。

「!? 何だ、クライス」

「アルテミス、何？」

「君たち、今説教中ってことを忘れてないか？」

「悪い、考え事に夢中になってた」

「はあ…もういいでしょう。結果としては得るところがありましたし。今回の事については不問とします。ただし、二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい」

「すみませんでした」

徐々に、レフィトの考えに近づいている二人。真実を知ったとき、二人はどうするのか。

「クロノ、事件の大元について、何か心当たりが？」

ほとんど黙って静観していたクロノに、リンディは問いかける。

「はい。エイミィ、モニターに」

「はいはい」

クロノは返事をし、この場にはいないエイミィに話しかける。ブリッジでこの部屋でのやり取りを聞いていたのか、すぐに場にそぐわない明るい返事があり、テーブルの中心に丸い空間モニターが現れる。

「あら…！」

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストロッサ」

映ったのはプレシアの科学者として働いていた時の白衣姿。

「専門は、次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データと、さっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく…」

「フェイトちゃん、あの時『母さん』って……」

「親子…ね？」

場の空気が少し重くなる。蒼夜と詩織は一言も発さず、静観している。理由は……

——久しぶりだな、蒼夜、詩織。

——爺さんか。何のようだ？

――用件は手短に。それとも、一発殴らせてくれるの？

――なんでそうなるんだ？ そんな事より主ら、力をまだ、制御し切れてないじゃろ？

――それが？ 俺たちは自分の力を全く使わずに、隠して生きてきたんだ。制御出来ないのも当然だろ。

――レフィット様ー、追加の書類でーす。

――なんだこの量！？ さっきの五倍はあるぞ！！？

――レフィットっていうのね。逝ってきなさい。その光景を思い浮かべて笑ってあげるから♪

――字が違うだろ！！ ってか、俺にはそんな役しか回って来んのか！！！？

――レフィット、口調変わってね？

――こっちが素なんだ。別にいいだろ。神が皆、あんな喋り方なわけじゃない。

――それもそうね。

――用件はもう済んだ。名前を伝えるだけだったからな。じゃあな、頑張れよ。

――お前もな。

――逝ってきなさい♪

――もう突っ込まないぞ。

神との脳内会話が繰り広げられていた。神様弄りも面白いね♪

「そ、その…驚いてたって言うより、何だか怖がってるみたいでした」

「エイミー！ プレシア女史について、もう少し詳しいデータを出せる？ 放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも」

「はいはい、すぐ探します」

なのははプレシアの映像を見て、暗い表情をしていた。蒼夜はいつもどおりの表情だが、詩織はなのは同様暗く、だが、憎しみに似た感情を押し殺していた。

玉座のようなものが置かれている広間。そこに直接転移したフェイトたちに、プレシアは一瞬驚きを見せたが、すぐに表情を元に戻す。気絶している凛に視線を向け、誰にも気付かれないよう小さく「ごめんね。ありがとう」と、呟く。次に視線をフェイトに向けると、怯えて一步下がりそうになるのを堪えていた。

「これでジュエルシードは十五個。残りは全部、管理局の手伝いをしている白い魔導師が持っている。もう少しよ、フェイト。残り全部、奪ってきて頂戴」

「はい、母さん」

「彼を連れて帰っていいわ。アルフは少し残って頂戴」

いつもみたいに怒られると思っていたフェイトは、驚きと同時に内心ホッとしていた。だが、アルフが残るということに、再び不安を抱く。当のアルフは、主を心配させないために、大丈夫だから先に帰ってて――とフェイトの目を見て言う。完全に不安を拭えたわけじゃないが、アルフが言うのならと思い、部屋を出る。

残ったのはアルフとプレシア。アルフは敵意剥き出しの視線をプレシアにぶつけるが、プレシアは気にすることなく口を開く。

「アルフ：フェイトのことを、お願いね」

「どうのことだい？」

プレシアの口から発せられた言葉が信じられず、聞き返す。信じられなかったのは言葉の意味だけじゃない。その言葉から感じられた悲しみ、別れを惜しんでいるような感じがしたから。

「私はもう、長くないの。今日の空間攻撃、フェイトに当てるつもりはなかったのだけど、制御しきれなくてあの結果になったわ」

「そんなの信じられるか！」

「信じられないでしょうけど、本当よ。だからあなたにお願いするの。フェイトと誰よりも長く過ごしていて、フェイトの事を知ってい……ゲホッゲホッゲホッ」

話している途中、急に咳き込んだプレシア。手で押さえているが、隙間から血が床に落ちる。それを見たアルフは、急いでプレシアに駆け寄る。

「プレシア！」

「これで信じてもらえたかしら……？」

「完全には無理だけど……でも今まで、何で黙ってたんだい？」

「私が、今まで忘れていたこと、アリシアのお願い…」
「アリシア？」

初めて聞く名前に抱いた疑問を消しきれず、名前を復唱していた。

「あなたには、真実を教えるわ」

昔、私は次元航行エネルギーの開発責任者だった。そんな私には娘が一人いた。名前はアリシア。

私は仕事が忙しく、アリシアに母親らしい事をしてあげられなかった。ある日、私とアリシアは二人でピクニックに行った。その時に、誕生日のプレゼントに何が欲しいか聞いたら

——妹が欲しい。妹が居たらお留守番も寂しくないでしょ。

それから数日後、私たちのグループが開発していた次元航行エネルギーに、局が入り込んできて開発期間を一週間以内に締められた。そして最終日の出力調整は私たちがやるはずだったのに、彼らが無理矢理始めた。出力を上げすぎて暴走したエネルギーは施設だけでなく辺り一帯、私とアリシアが住んでいた家まで影響を及ぼしたわ。エネルギーには、私たちの知らないところで違法物質まで使われていた。その所為で私は放逐、更にはアリシアを失ったの。

私はアリシアを生き返らせるために、使い間を越える人造生命の開発を始めた。結果、成功はしたわ。目を覚ました娘を家に連れて帰って数日後、アリシアの記憶はあるのに、利き腕も、魔力資質も、性格さえ違うことに気が付いた。それがフェイトよ。

私はアリシアの願いを忘れていた。この前、彼が来るまでは。

プレシアの話が終わった。

「彼ってのはもしかして……」

「ええ：月影凜よ」

「それは分かった。だけど、思い出したんだったら何であたしにお願いするんだい？ 残り僅かな時間でも、精一杯愛そうと思わないのかよ！！？」

「彼にも同じ事を言われたわ。でも、もう遅いのよ。私は犯罪者。フェイトの幸せのために私は、消えなければならぬ。でも、ただ消えたんじゃ、あの子にも罪が着せられる。だから今度、この場所を管理局に知らせるわ。フェイトが全てのジュエルシードを手に入れるためにはあの白い魔導師と戦わなければならない。でも、管理局がただでそれを許すとも思えないわ。あなたたちの帰還先を追跡する準備を必ずする。それでいいの。それで、全てを片付けられるのだから」

悲しい表情をして言うプレシア。アルフはプレシアのそんな姿を見て、無理をしている、別れを惜しんでいる自分に言い聞かせてると思えなかった。

「彼にもお願いをしたわ。聞いてはくれなかったけどね……フェイトは気付いてないのでしょけど、彼が好きみたいだから。彼も気付いてないみたいだったけど」

「全然気付かなかった……」

「親は子の変化に敏感なのよ」

親らしい事を言うプレシア。アルフはプレシアに、もっと生きて欲しいと思い始めた。今までの行動を許したわけじゃない。でも、

アリシアの、フェイトの親として娘の幸せな姿を見て欲しいから。

「話は終わりよ。帰っていいわ」

「わかった。あんたの作戦、私も手伝う。あの子たちの友達に、捨て犬をよく拾う友達がいるらしいんだ。そこで拾われて、管理局にあんたが今までフェイトにした話を話す。そうすれば、フェイトはあんたに：こんな言いかたしたく無いけど、道具として使われてたって事になるだろうから、無罪で済む確率は上がる」

「ありがとう。思えばあなたにもたくさん酷い事をしてきたわね。ごめんなさい」

「もういいさ。それじゃ、あたしは行くよ。じゃあね」

背を向けて歩き出す。全てはフェイトのために。家族として僅かな時間でもすごせるようにするために。

t o b e c o n t i n u e d

11話（後書き）

プレシアはとてもいい人になりました♪
やっぱり、ハッピーエンドのためにはこうしないと。

そしてアルフの心境の変化。

最後に『全てはフェイトのために』と書かれています、違います。
フェイト、アリシア、プレシア、そして自分のために行動に出ます。

次回はなのは名物、魔王砲がですよ♪

N「魔王じゃ……ないのおおおお!!」
R・H「S・L・B」

ぎゃああああああ!!

番外編 胃痛チート1／2（前書き）

今回は雨季様の「チートじゃ済まない」とのコラボです。

タイトルを見れば、分かる人は分かるあの人が登場します。

二分割しました。

番外編 胃痛チート1／2

レフイトside

あゝあ：魔装具が一つ、暴走したか。

凜一人では対応できないし……蒼夜と詩織は力を使いすぎて、暫くの間戦闘、及び魔法や霊力の行使は禁止したからな。

となると、他世界から呼んでくる必要がある。適当なのはゼウス様によって転生させられた一条要。だが、神力は僅かに流れているし、どんなに強力なただのパンチでも、神力の所為で痛みはおろか、痒みさえない。まあ、何もしないよりはいいだろ。

「ゼウス様、お願いがあるのですが」

「いいよ」

「まだ何も言っていないですよ！」

「要くんを貸して欲しいんですよ。今、彼に連絡するから待ってて」
「はい」

ゼウス様、かなり変わってしまったな。昔は仕事も真面目だったのに今ではあの様。

「要くん、今からある世界に行ってもらいたいんだけど」
《どこですか？》

「月影凜のいる世界」

《いいですけど、何をしに？》

「魔装具の暴走を止める手伝いに行ってもらえますか？」

《誰ですか？》

「彼女の世界の管理者、レフイトです」

《彼女？》

やっぱり、混乱しますか。彼は彼女の事を男と思い込んでいるかな。

「凜は元女性だ。転生する際に男にした」

《何でだ?》

「そっちの方が面白そうだから」

《納得。こちらは準備できてるので、転移の方を》

「よろしく頼みます」

レフトside out

第32無人世界。適度な自然と水はあるが、人は住み着いていない。原生生物は比較的温厚なものが多く、リンカーコアもある。

見晴らしのいい草原の真ん中。一人の男性が黒い大剣を肩に担ぐように持っている。その周りには数多の生物の死骸。だが奇怪なことに、血が全く飛び散ってなく、一滴残さず抜き取られたような死に方をしている。

「そこのお前、大人しくしてもらおうか」

男性に少し離れたところから凜は声を掛ける。その右手には黒い刀。男性から放たれる殺気は異常だが、凜は物怖じしていない。

そんな凜の隣に一つの魔方陣が現れ、光が溢れる。光の中から現れたのは銀髪の青年。

「か、要!? 何で此处に!?!」

「お前んとこの神様に頼まれて来た。つで、魔装具の暴走を止めて

くれてって言われたんだが…あの男が持つてるのか？」

「はい。ただ、要の力は全て無効化されますよ」

凜の言葉に、何故？ という顔をする。

「要は神の力によって転生させられ、力を貰った。その際、僅かに神力も一緒に貰ってるんです。あれは神力と天力を完全に無効化するの、要の攻撃、と言うよりも、神力をコントロールしていない全ての転生者、もしくは神に力を貰った者の攻撃は無効化される。ってわけ」

「厄介だなく。だったら、お前も貰ってんじゃねえの」

「これを止めるために転生させたのに、神力を取り除かなかったんじゃないじゃないじゃん」

「それもそっか」

男性は一步で凜の目の前に移動し、大剣を振るう。凜はそれを刀で防ぎ、鏑迫り合いに持ち込む

「それだったら……」

要は懷から一丁のハンドガンを取り出し、男性に向けて打った。放たれた弾丸は本物ではなく、魔力で出来たもの。男性は当たった瞬間、僅かに驚いていたが、すぐにその場から飛び退く。凜と要はすでに遠くに移動していた。直後、地面に何かが落ちた瞬間、爆発した。

「要、今のは……？」

「魔道式ハンドガンと魔道式手榴弾だ」

「物騒だね」

「だが、使い勝手がいいぞ。弾切れたら終わりだが」

「吸い取れ……」

男性が爆煙の中から飛び出し、要に切りかかる。

「滅ぼせ」

凜は要の前に立ち、刀で大剣を破壊する。

「虚空・碎牙」

がら空きの胴に刺突を放つ。吹き飛んだ男性は大剣を地面に突き刺し、勢いを殺して体制を整える。

「それ」

上空から降ってくる一つの手榴弾。反応が遅れた男性はもろに食らうが、ほとんどダメージが無い。

「一つ質問いいか？」

「何？」

「あいつを殴ったらどうなる？」

「魔装具の種類によるから……周りの死骸を見るからに、剣に触れたら血を吸い取られると思う」

「剣に触れなければいいんだな」

「うん」

要が男性との距離を一気に縮め、殴り飛ばす。ダメージは無いが、吹き飛んだ先にあるのは巨木。背中から激突し、肺に溜まっていた空気が全て吐き出される。

「こうすればダメージ与えられるだろ？」

「無茶するな」

——お前が言えることか？

「うっさい。ゼブル、もうちょっとくらい、力を解放しても平気だよ」

——わかった。リミットリリース、40%。

「共鳴率、106%、117%、125%。漆風・ゼブル」

刀の形状が不確かなものになる。固まっていたドライアイスが徐々に溶けてくように……。

「ORT部分開放」

要の体から二本の異形の腕が現れる。

「要、あいつの攻撃は絶対に食らうなよ！ 死んだら神でも蘇生させることは出来ないからな！！」

「マジでか！？」

「神力が混ざってる奴はたったの一発でも致命傷。いくら力をコントロールできても、神や天使を殺す武器に攻撃されたら一たまりも無いよ！」

「そんな事聞いてねえんだけど」

「お前の身体能力の異常さから考えて、問題ないと思ったんでしょ。ちなみに、あいつの身体能力は魔装具の所為でセーブされて無いから100%ってところ」

「なら、それを上回る！ 限界突破・身体能力120%。神速」

要の姿が消失する。男性の後ろに回って異形の腕で打ち上げようとするが、逆に背後に回られる。だが、そう来るとわかっていたのか、振り向きざまにもう片方の異形の腕で打ち上げる。その異形の腕はボロボロで、使い物にならない。腕を引きちぎり、再生しようとするが、普段より遅い。

「再生がいつもより遅いな…」

「剣に触れるなって言っただろ。神力をコントロールできないんだからそうなって仕方ないよ」

空中に跳び上がってもう片方の異形の腕で叩き落す。男性が地面に激突すると、巨大なクレーターが出来る。地面に降り立った要は、衝撃の反動から起き上がった男性を再生した異形の腕で再び吹き飛ばす。その先に居るのは刀を鞘に納め、抜刀の構えをしている凜。

「絶閃！」

抜刀した刀を音速を超える速度で、男性の持っている剣ではなく、右腕にしてあるブレスレット目掛けて振るうが、男性が無理な体勢から大剣を振りぬいて防ぎきる。

「ブラッディ・ランス…」

男性の右手に作られた血の槍。それを抜刀直後で体勢を立て直せていない凜に狙いを定め、投げる。だが、凜の手から刀が消え、黒い球体はその身を包み込み、防ぐ。

「要、一分だけ…時間を稼いでくれ。お前の攻撃は僅かだけど、効いてるから」

「転生者の攻撃はあいつに効かないんじゃないのか？」

「おれも最初はそう思ってたけど、なんか効いてるみたい。たぶん、要の力が相手の神力・天力を持つ全ての攻撃を防ぐ許容量を超えてるんだと思う」

「それだったら神でも壊せたんじゃないかねえの？」

「まだ、完全に封印が解かれてないからかな？　だから効くん다고思う」

「ま、そうとわかりやゝ潰す！　武装O R T」

異形の腕が消え、要の体が異形の腕と同じ雰囲気のものになる。

「ゼブル、コーティングしてあげて」

——そんなに長くは持たんぞ。せいぜい三分といったところだ。

「それだけあれば十分でしょ。強すぎる攻撃を受けなければ」

要の身体を黒い霧が纏わりつく。

「何だ、これ？」

「ゼブルに頼んでコーティングしてもらった。バリアジャケットみたいなものだと思って。効果は三分。その間は相手の攻撃をたいてい防いでくれる」

「そか。サンキュー」

地を強く蹴り、異質な姿となった要は男性との間合いを詰める。その間も飛んでくる血で出来た弾丸は、全て黒い霧が弾く。

吹き飛ばないように腕を掴み、腹を殴る。本来、飛んでいく事で逃がすことの出来る衝撃は、腕を掴まれてそれが出来ないために残り続ける。僅かに効いている攻撃を逃がさないようするためには、

これ以外に方法が無い。蹲った男性の腕を放し、地面に叩きつける。踵落しを決めようとするが、男性の体から飛び出した血の針が霧の防御を超え、要に突き刺さる。すぐにその場から飛び退いたおかげで、刺さったのはたったの一本。だが、普段は再生するはずが再生しない。それどころか、武装O R Tが攻撃を食らった箇所から徐々に解除され始めている。

「これ、やばくないか？」

「リミット・フルブレイク：共鳴率150%」

《カウントダウン開始。残り57秒》

黒い球体が弾け飛ぶ。普段の銀髪は黒く、人としておかしくない程度だった白い肌は異常なまでに白い。

「要、ありがと。傷のことはレフイトに頼むから待ってて」

「わかった。もう少し暴れたかったが、さすがにこれは不味いからな」

要が凜の後ろに移動する。

「滅ぼせ……」

凜の眩きの直後、男性の周囲が爆発する。だが、それで終わりはず、血の槍が何本も飛んでくる。それらは全て、凜の持つ氷結系の魔法で凍りつき、粉々になる。

「穿て……フリーズランサー！」

粉々に碎け散った氷が宙を舞う。キラキラと、陽の光を反射して輝くそれは、親指くらいの大きさに纏まり、男性に向かっていく。

それを撃ち落とすべく、血の槍を放つが全て凍りつき、それらも男性を襲い始める。

――残り、24秒。

「これで決めるよ」

小さな氷の槍を全て避けきった男性の右腕のブレスレットを見る。目を閉じ、深く息を吸い、吐く。背中から三対の漆黒の翼が生える。開かれた瞳は、全てを飲み込むような、とても暗く、悲しい瞳。

「ごめんね……………虚空・乱舞！」

一撃一撃が、オーバーSランクの斬撃を障壁を張って防いでいたが、徐々に罅が入り、碎かれる。残り十数発の斬撃は更に威力が高く、小さい。それらは全て、ブレスレットに辺り、破壊する。だが、それで終わりではない。

「ラスト……ハアアアアアアアア！」

最後に放たれた巨大な斬撃。それは破壊したブレスレットだけでなく、男性をも飲み込み、消し飛ばす。

後に残ったのは巨大なクレーターと、斬撃の跡。

凜の姿は元の姿に戻っている。要の方に向き直り、声を掛ける。

「神様の所へ行こう。怪我の事で相談しないといけないから」
「わかった」

神界にある建物のレフィトの部屋。毎度の如く、書類が山のよう
に積まれている。

「要くん、魔装具の件、手伝ってくれて感謝する。それで、怪我の
件なんだが……」

「この怪我を治すことは出来ないってさっき聞いた。方法としては
一度死んで蘇生させる。その際に神力も完全に抜くんですよね？」

「そうだ。覚悟は出来てるようだね」

「はい」

要の返事を聞いたレフィトの手には、一本の光り輝く剣。

「ゼウス様に聞いたところ、君を殺すには、頭を一瞬で吹き飛ばす
必要があるようだね」

「ああ」

「じゃあ、約一分後にまた」

要の頭を光の斬撃が吹き飛ばす。完全に死んだ事を確認し、すぐ
に蘇生の準備を始める。力を殺す前と全く変わらないように調整し、
神力を抜く。蘇生に必要な準備が整い、要の死体が光に包まれる。
光が晴れたときには、以前と全く変わらない姿でその場に寝ていた。
指が僅かに動き、目を覚ます。起き上がって手を閉じたり開いた
りし、異常が無い事を確認する。

「どこか変わったところはあるかい？」

「全く無いです」

「それはよかった。で、一つお願いがあるんだけど……」

「なんですか？」

「一度、凜と“死合”をしてくれないか？ 彼女はすでにOKして
いる」

「いいですよ」

神の後ろをついていく。案内された場所は何も無い白い空間。凜はそこで横になって寝ていた。

「凜、要くんを連れてきたよ」

「……おはようございます……」

「……準備はいいかな？」

「俺は平気だ」

「私も大丈夫です……リティス、セットアップ」

「Stand by ready, set up」

「身体能力70%、アルティメットワン発動」

「死合開始」

レフイトの間の抜けた合図で、死合は始まった。

番外編 胃痛チート1／2（後書き）

雨季様…物語上、こういう形になってしまいましたが、大丈夫で
しょうか？

次回は要と凜の死合。まあ、短めの予定です。

番外編 胃痛チート2／2（前書き）

これが俺の実力じゃー！！！！

凜「うっさい！」

NOOOOOOOOOOOO.

番外編 胃痛チート2／2

先に攻撃を仕掛けたのは凜。離れたところから凍結能力のある魔力弾を十発飛ばす。速度はかなりのものだが、要はそれを全て躲し、凜に殴りかかる。

「カシムル
神速」

紫電を身に纏い、一瞬で間合いを取る。

凜はオールラウンドだが、要の戦闘スタイルは主に接近。勝つためには間合いを取る必要がある。

「ニードルガン」

魔力弾の形を変え、小さな針として飛ばす。身に纏っていた紫電を放出し、部屋全体に攻撃をすることで、ニードルガンを撃ち落とすことは出来たが、要には全く効いてない。

「リテイス、モード・ハンドガン」

凜の手に一丁の拳銃が握られる。

「共鳴率、130%。制限解除、70%」

銃の色は白く、だが、とても禍々しい。身体能力面のリミッターを強制解除し、いつもの倍以上の速さで動き始める。

「シールドスライサー！」

「シャドウ・ブラスト！」

薄く、鋭くなったシールドを、黒い魔力弾で撃ち落とそうとするが、切られる。

「シャドウ・スパイク！」

魔力弾の形成が不安定な状態で、次の魔法を発動する。霧散しかけた魔力素が形を取り戻し、半球状態から鋭い針を伸ばす。それらはシールドを貫き、罅を入れて破壊する。

「アイス・シエル！」

「フッ…！」

凜を包み込むように出来上がった氷の球体を要は殴る。一発で壊れ、中に居た凜はすぐにその場から飛び退く。

「凍てつけ…：穿て、フリーズランサー！」

氷を殴った要の腕が凍る。更に、至近距離からの無数の氷槍。

「シールド・三重」

三枚のシールドのうち、二枚を破り、残りに罅を入れたが、そこで攻撃は止む。当然、要は無傷。凍り付いていた腕も、すでに元に戻っている。

——今のあいっと対等に戦うには、私の力を50%解放しなければならぬぞ。

「それはダメ。長期戦になるかもしれないんだから、せめて30%」

——分かった。リミット30%ブレイク。

「漆風・ゼブル、氷剣・ラグラス。共鳴率、140%。黒刃氷牙・ラグル」

「ORT部分開放」

銃をホルダーにしまい、両手で黒い、氷の剣を構える。
対する要は、異形の腕を二本生やす。

「潰す！」

「滅ぼす！」

同時に駆け出し、要は異形の腕を、凜は刀を振るう。鈍い音が響くが、どちらもダメージは無い。
先に離れたのは凜。手数では要の方が多いため、こうするほか無い。

腰溜めに剣を構え、魔力を込める。

「虚空・斬」

放たれた黒く冷たき刃は、虚空を切り裂きながら突き進む。

「ふんっ！」

だが、要はそれを異形の腕で簡単に握り潰す。間合いを詰め、殴りかかってくる要に対し、凜はその場を動かない。殴られた直後、氷が砕け散る。

なら、凜はどこにいるのか？ 答えは……

「シャドウ・スラッシュ！」

要の影の中だ。破滅の真の能力は闇。デスベア更に言えば黒いもの、内なる闇を表した存在。それは影。影は人が普段表に出す、正の感情とは真逆の性質を持つ。それがなくなれば、生物としての形を維持できなくなる。故に危険なものであり、また、本人を苦しめる闇を増幅させるもの。

「ちっ！」

高く跳べば跳ぶほど影は大きくなり、更に、攻撃範囲も広がる。影を握りつぶそうにも、それは形があるようで形がないもの。そんな事出来るはずもなく、攻撃を食らう。

血が飛び散るが、アルティメットワンを発動していたから、傷はすぐに塞がる。

「なかなかやるな」

「その再生速度は反則じゃないの？」

「そう言うお前は俺の攻撃を全く食らってないだろ」

「刃と異形の腕がぶつかる度に、腕が痺れてきついんだけど……」

「そうか。なら、もう少し本気を出すぞ。限界突破、身体能力150%」

「いきなり身体能力1.5倍……しかも、全力じゃないし……」
「行くぞ」

要の姿が消失。だが、凜は確りとその動きを捉えている。背後からの攻撃を屈んで躲し、蹴りをそのままの姿勢から前転して避ける。上から押し潰すように迫ってくる異形の腕は、黒い霧を操って闇の世界へと潜り込む。

黒い霧を部屋全体に充満させ、どこからでも攻撃を仕掛けられる

ようにする。

だが、ここで一つ、問題が発生する。それは、一条要の気配察知能力が異常なまでに高いということだ。

先の氷は殴られるずっと前に、闇の世界に潜ませていたもの。殴られる直前で、闇の世界に一瞬で潜り込み、氷と入れ替わる。これは何時、入れ替わったのか分からないようにするため、少しでも遅ればばれて終わる。

アイス・ソルジャー
闇の中に大量の氷の兵隊を作り出す。自身も含め、全ての刃に紫電を纏わせ、氷の鞘に納める。

「完全武装・ORT」

要はどこから攻撃が来てもいいように、異形を人の形で身に纏う。アルティメットワンにこの状態の防御力は、凜からすれば絶対防御と言える。

姿勢を低くし、柄に手を掛け、抜刀の構えを取る。

「雷空破碎斬!!」

要を囲むように闇の中に配置された氷の兵隊も、アイス・ソルジャー凜が技を放つと同時に抜刀。紫電を纏ったそれぞれの斬撃は闇の中から抜け、要に迫る。

「散れ……」

凜が小さく呟くと同時に、紫電が斬撃から離れる。斬撃だけが要に当たり、僅かに傷をつけたがすぐに再生する。だが、それで終わりではない。

斬撃から離れ散った紫電は全て繋がり、一つの大花となる。

「雷花！」

紫電が部屋全体に広がると、大きな爆発が起きた。理由は、凜が幾度となくしようとした氷結系の魔法。氷は解け、水になるのが普通だが、凜の能力はそこで止まらない。気体から液体になるのをすっ飛ばして固体を作れるのなら、その逆も然り。本来なら水蒸気となるが、凜はそれを電気の力で酸素と水素に分解した。再び、そこに電気を流せば起こるのは、酸素と水素の化合の際に生まれる爆発。これが普通の人間なら確実に死んでいるが、相手は転生者であり、チート。いや、それじゃ済まないほどに強い。この攻撃でダメージを与えられればそれなりに強いということになる。

「ビックリした〜」

爆煙の中から聞こえたのは、間の抜けた声。もちろん、発したのは一条要。

黒い霧が晴れ、闇の中から姿を現した凜。まだ体力と魔力に余裕があるのか、息は上がっていない。だが、頬を冷や汗が伝う。圧倒的なまでの力の差に驚き、目の前の存在に恐怖している。

「フッ！」

短く息を吐き、凜を殴り飛ばす。剣の腹で受けたものの、驚異的な破壊力に耐え切れず、足が地面から離れたのだ。空中で体勢を整え、ホルダーから銃を取り出して引き金を引く。

「フリーズ・ブラスト！」

放たれた弾丸はORTの装甲の前では無意味。凍り付いても、すぐに碎ける。

「シッ！」

短く呼気を吐き、再び殴り飛ばす。

「キャアアアッ！」

痛さに悲鳴を上げるも、自分のすぐ下に平面の氷の塊を作る。剣を突き刺し、勢いを殺して氷塊の上に着地。

魔力を流して砕き、一つ一つが二メートルはある巨大な氷槍を二十本作る。

「フリーズランス」

近くにある槍を一本持ち、全力で投げつける。魔力で強化された腕力に身体能力のリミッターを外した攻撃。だが、それすら要の前では無意味にすぎなかった。

「貫け！ フリーズランス！！！」

残り十九本の氷槍を一つにし、細く、鋭く、長く作り上げる。要の攻撃を紙一重で躲し続け、とうとう完成した全長四十メートルはあろう巨大な槍。それを闇の中目掛けて投げる。

闇の中は無限に広がる空間と言ってもいい。槍の突き進む方向が要の居る所と違って、出口を要の目の前にすれば攻撃することも可能。

要は何か裏があると思いつながらも、凜に攻撃を仕掛ける。

要の動きに目が慣れてきた凜は、攻撃を刀だけでなく、腕も使って受け流す。避け切れない攻撃は氷塊で叩き落したり、左右に弾きながらやり過ごす。

だが、まだ要は全力を出していない。それに隙が全くなく、攻撃を防ぐだけで精一杯。

「貫徹ええええええ!!」

だが、再び黒い霧の中に入り、今度は横から。永遠に同じ事が続くと思った要は避けるのを止め、潰そうとする。暫くの拮抗の後、負けたのは要。

「ぐっ！」

「中からの攻撃には外に比べて弱いのが、全ての生き物に共通してるのは知ってるよね。」

刺さった槍から大量の針が飛び出す。だが、外皮がかなり硬いた

ている。さらに身体能力を100%まで解放することが出来るため、打撃にはそうとう強い。

それでも、他のチートに比べればまだまだ弱く、発展途上。トックラスとも言える要に勝つには魔装具の力を完全に解放し、更に力を完全支配すること。今の凜でそれを行うことは出来ない。

「ゼブル、自我を失わないで済む時間はどのくらいだっけ？」

――十分だ。それ以上は分からん。

「わかった。要、今から全力で行くよ。もし、暴走したら殺して。レフィットが蘇らせてくれるから」

「ああ！」

――リミット・オールブレイク。身体の異常：なし。いつでも行けるぞ！

「暗黒共鳴……」

凜の身体を黒い霧が包み込む。髪は黒く、肌は真っ白。瞳は底の知れない闇を思わせる漆黒。背中から生えた黒い三対の翼。そして、宙を漂う黒い氷刀。それを右手で取り、左肩から斜めに振り下ろす。

「共鳴率：170%。身体能力100%解放」

「身体能力200%！」

互いのステータスが一気に上がる。

今の凜の魔力量はほぼ無限とも言える。それが魔装具の力を完全に解放することで得るメリット。デメリットは、増幅する己の闇。

同時に駆け、袈裟懸けに斬るが簡単に弾かれ、反撃に要は突きを

放つが、障壁で阻まれる。突きを放てば横を叩いて防がれ、顔面を狙った蹴りを躲す。逆袈裟は身を反らして避け、そのままの勢いでバク転。振り上げられた足に当たらないよう、後ろに跳ぶ。

刺突の構えを取り、一気に間合いを詰める。連続で放たれた刺突をギリギリで躲し、隙を突いて神速を使用。背後に回って凜の両肩を掴む。

「拔骨！」

「うっ!？」

肩の関節を外され、刀を落とす。ガラスのように音を立てて割れる。

「カシムル神速！」

紫電を身に纏って高速移動魔法を発動、移動している間に間接を元に戻し、再び刀を作る。

「虚空・乱舞!!」

無数の斬撃を、全方位に向けて放つ。攻撃が収まり、視界が悪くなった部屋全体の気配を探る。

「ふんっ！」

横からの攻撃をギリギリで避ける。少しでも反応が遅れていたなら直撃。顔が吹き飛んだであろう。

刀を消し、要の懷に潜り込む。もちろん、迎撃しようと蹴りを放ってくるが、直前で消失。

「獅子破光掌!!」

一瞬で背後に回り、掌底を放つ。攻撃に反応し切れなかった要の背に掌が触れ、黒い光が破裂。要にダメージを与えることに成功。凜の取り得がオールラウンドで、スピードとそこその頑丈さに対し、要は接近が主体のパワーと圧倒的な防御力。更に、凜とほぼ同等のスピード。凜が圧倒的に不利なのだが、その差を埋めるのが魔装具の力。

「破滅の光よ、降り注げ！ シャイニング・レイ!!」

極太の黒と白の光が次々に降り注ぐ。この技の特徴は、自分が敵と判断したものにはダメージ与え、見方と判断したものは傷を癒す。だが、どんな力にも必ず欠点がある。この技の欠点。それは、術者の精神を大きく削るということ。

「今のは流石に効いたな」

「じゃなかったら困るよ」

上がった息を整えながら、凜は言う。要の傷はすでに癒えている。

「シッ！」

「フッ！」

真正面からの激突。先の攻撃もすぐに癒えては意味がなかったため、至近距離からの全力を叩き込もうと刀を振り続ける。空気が振るえ、床が挟れる。

だが、ここは神の住む神界。部屋はすぐに元に戻る。

「光破！」

「無駄だ！」

刀と拳がぶつかった直後に、光球が破裂。だが、ダメージは無い。袈裟、横薙ぎ、刺突、斬り上げ、斬り下ろし、逆袈裟と、刀を振り続けるが、頑丈なO R Tの外殻に傷を付けられない。

「いい加減………」

小さく呟き、袈裟懸けに刀を振り下ろそうとする。

「腕の一本ぐらい吹き飛んでよ!!！」

刀が紅く輝き、腕を切り落とす。やっと、まともに攻撃が入った。だが、すぐに再生を始める。

刀は未だに紅く輝き続けている。

「紅蓮・霸光斬!!！」

紅蓮の斬撃を要は握り潰そうと受け止める。

「潰す!!！」

未だに拮抗を続けている。斬撃の威力は衰えること無く、要は握り潰すために更に力を籠める。

『はああああああ!!！』

互いの力が同等のまま拮抗し続けた結果、巨大な爆発が起きた。爆煙が晴れ、姿を現した二人。要は両腕を、凜は右腕を失っている。要はすぐに再生したが、凜は未だに傷口から夥おびただしい量の血が流

れ続けている。

「凍てつけ……」

傷口を凍らして止血をする。リミットも、体力も限界に近い。

刀は黒い、元の色に戻っている。

「これで終わり……覇光槍!!」

「全力で叩き潰す!!」

刀を消し、禍々しい光を放つ槍を投擲する。真正面から、拳を連続で叩き続ける。槍の形状が不安定になる。

——凜、タイムアップだ! 血管が裂けるぞ!!

「この一撃で終わりだから……絶対に耐える!」

槍が碎ける。槍を殴っていた拳に傷はない。それを見た凜が気を抜いた瞬間、体の至る所から血が吹き出す。

——全ての力にリミットを掛ける!

姿が元通りになるが、血は止まらない。部屋の扉が開き、レフィトが入ってくる。

「死合は終了しましたか。要くん、ありがとう。これで彼女は自分がどれだけ弱いか気付いたはずだ。

精神も、力も、まだ弱い。今回、要くんに深手を負わせたのは想定外だ。あそこであの力が発動するとは思わなかったからね」

「あの力って、紅い光のことか?」

「ああ」

話をしてる間に、凜の怪我を治していく。傷は徐々に塞がり、失った右腕が生える。

「アレは何なんだ？」

「それはネタバレになるから言えないね」

「そうか」

「今回は本当にありがとう。また頼むかもしれないから、その時はよろしく」

「ああ」

要は光の粒子となって神界から消えた。

番外編 胃痛チート2／2（後書き）

凜「前回とかなり書き方変わってない？」

戦闘は何故か書きやすい。

さて、全開要を殺した理由ですが、神力をもった者が魔装具の攻撃を食らうと、傷を治すことが出来ません。それどころか、どんどん悪化していきます。

凜「具体例は、灼眼の○ヤナにでてくるステイグマというものだそうですね」

さて、死合とか言っときながら、全く死合に見えないと思います。すいません！

凜「暫く活動を休止するようです」

理由は、原作者になろうに新しく思いついた作品を投稿してみようと思ひまして。

凜「次の更新でまた会おうね♪」

今更ながら主人公設定（あとがきに追記）

つきかげりん
月影凜

性別…男（転生前は女）

年齢…9歳（転生前は16歳）

身長…126cm

体重…19k

誕生日…5月23日

詳細…

彼？の世界に紛れ込んだ魔装具に触れたのをきっかけに、異世界に転生させられた。

性別は神の気まぐれ。

神と人との間に生まれた次女。神力、靈力共に無し。だが、存在感が何故か強く、その秘密を知っているのは彼女を転生させた神、レフィトとその部下だけである。

魔力ランク…SS+

デバイス…インテリジェントデバイス、リテイス

起動した時の形状…

ペンダントとして常に首にぶら下がっている。銃の時と極雷剣の時だけはその姿を変える。それ以外の形態は不明。デバイスと使用

者の間の回線パスを強化する、『共鳴』というものがある。

魔力変換資質…土・水・火・風・氷・雷・光・闇の八つを使えるが、ほとんど氷と雷を使用。

魔装具…デスベア破滅

力を完全解放すると、魔力は無限と言える。だが、肉体がついていけない。デバイス同様『共鳴』
できるが、性質は闇で頭に『暗黒』が付く。

氷剣ラグラス…

凜が魔力変換資質、氷結で作る武器。デバイスや魔装具とのパスを強化する事で、様々な追加能力を発揮。

デバイス1stモード…銃

デバイス2ndモード…極雷剣

刃は銀色で峰は白。鍔は蒼く、柄は黄色の長刀。技、『極光雷斬』を使用するための武器。

花咲かざきそうや蒼夜

性別…男

年齢…10歳（転生前は17歳）

身長…145cm

体重…37k

誕生日…10月9日

詳細…

凜を転生させる時、ついでに転生させられた者たちの一人。

底が尽きる事を知らない霊力の持ち主で、幽霊を良く見かけるが気にしていない。最近ではコントロールできるようになってきていて、力を完全に押さえ込むと霊が見えなくなる。時々、殺気として相手にぶつける事がある。

魔力ランク…S+

デバイス…インテリジェントデバイス、クライス

起動した時の形状…

凜同様、常に首にぶら下がっている。武器の類はデバイス内に収納されている、変わったデバイス。こちらも『共鳴』というものがある。

魔力変換資質…劫火（火のランク二つ上）・空気・風・氷を使用。
霊力による属性は未だ不明。

炎刀・焰…名の通り炎を纏った刀。

かみやしおり
神谷詩織

性別…女

年齢…9歳（転生前は凜と一緒に）

身長…130cm

体重…22k

誕生日…7月30日

詳細…

蒼夜と同じく、凜を転生させる時、ついでに転生させられた者たちの一人。

闇と光のように、対照的な存在の力を調和させる力を持つ。それとは別に、神力とも天力とも違う、神秘的な力を持っている。レフイトたちも、本人でさえも、それが何なのか分かっていない。

魔力ランク…S+

デバイス…インテリジェントデバイス、アルテミス

起動した時の形状…前者二人と特に変わらない。

魔力変換資質…水・雷・風・氷

バルテイス
風塵の弓…魔力変換資質・風の性能を発揮するための弓。最強技は『ゼピュロス・アロー』。

アルテミス
断罪の弓…魔力変換資質・光と闇が追加される特別な弓。白黒半々で、白い方には黒い翼の装飾が、黒い方には白い翼の装飾が施されている。最強技は『ジャッジメント・アロー』。

こんな感じです。

次に、タイトルについて疑問を浮かべるでしょう。

『これのどこが気まぐれ転生！？』

と。

気まぐれな部分は、ついでの転生と凛の性別を変えたくらいでしょう。ついでに転生させられた者にも、ちゃんとした役割与えられていますし。

実は転生者は子の三人だk……ゲフンゲフン。これ以上はネタバレですね。え？ 意味無いって？

それでも、一応隠してる的な感じでやらなくちゃダメなんですよ♪

では、これで本当に暫くは投稿しないと思うんで、さよなら！

今更ながら主人公設定（あとがきに追記）（後書き）

凜

詳細..

右目が紅で左目が蒼。

見た目は誰がどう見ても女の子。男子によく告白されるけど断ってる。（単純に男に興味が無い）

聖祥小五大美女の一人。

蒼夜

詳細..

黒髪（短め）黒目の男の子。

女子に結構モテルが、本人は知らない。

非公式で蒼夜ファンクラブがある。小3以上の女子がほとんど入会してる。他校生も入っている。

詩織..

茶髪で髪の長さは凜と同じ。瞳の色は灰色。

凜同様、男子にモテモテ。非公式で凜と詩織のファンクラブがある。そのうちの半分が詩織派で、三分の一が女子。凜も同じ。他校生も入会してる。

聖祥小五大美女の一人。

12話(前書き)

ああ……

内容が酷すぎ！

今月、カラオケ4回も行ったから金が無い……

本編どうぞ……

12話

真白な世界を、真黒な世界が侵食していく。

白い世界で、黒い世界から逃げている女の子みたいな少年。彼を追いかける黒い世界には、同じ見た目の少女。違う点を上げるならば、性別と髪の色、肌の白さ。

銀髪と黒髪、男と女、ギリギリ正常ラインの白い肌と、異常なまでに白い肌。

走って逃げる彼を、歩いて追いかける彼女。彼はとうとう、彼女に吞まれた。

「っ!？　ハア…ハア…ハア………」

——気分が悪い。さっき見た夢の所為だ。あの娘は、誰？　私に似てたけど…もしかして!？

ベッドから勢いよく起き上がった凜は、乱れた呼吸を整えながら夢のことを考えていた。

隣には、フェイトが頭だけベッドに乗せて寝ている。

「マスター、大丈夫ですか?」

「リテイス…うん、大丈夫だよ。少し怖い夢を見ただけだから。ねえ…私が気絶した後、どうなった?」

「あの魔法、フェイトに当てるつもりは無かったようです。マスターに、誰にも聞き取れないような小さな声で謝っていました」

そっか……—と言って、プレシアの変化に喜んでいた。

正直なところ、自分が説教みたいなことをしただけじゃ、絶対に変わらないと思っていたから。

「あと、アルフが昨夜から帰っていません。昨日のプレシアの様子から、アルフに何かするとは思えませんが……アルフも、プレシアに対しての不満はあったようですが、あのプレシアを見ては、手を出さないでしょうし……」

「それだったら大丈夫。たぶん、フェイトにも内緒で、なのはたちからジュエルシードを奪う方法を考えて行動してるんだと思うよ」
「へだいいのですが……」

フェイトを、今まで自分が寝ていた場所に移動する。

「リテイス、フェイトを見てて。少し特訓してくる」

「何時ごろにお戻りになられますか？」

部屋に置かれている時計を見る。時刻はAM5…32だ。

「二時間もすれば帰ってくるよ」

「フェイトが起きたら、散歩に言っていると伝えればよいですね？」

「うん。お願いね」

「お気をつけて」

家を出て近くの公園に行く。

足元に魔方阵を展開するのではなく、描く。描き終わった魔法人が光り、一部の景色を切り取る。凜はそこで、自分の精神世界にダイブしていった。

〈こうして話すのは久しぶりだな、凜〉
「そうだね。いつもは私の中から語りかけてくるから、直接話すことはないから」

白と黒が蝕み合い、不思議な模様が出来上がった精神世界。その風景は、凜が夢で見たものと似ていた。違う点は、白と黒の比率が等しいというところと、中心に漆黒の刀

があるだけ。

〈訓練をしに来たのだろう〉

「うん。力は100%解放していいよ」

〈分かった〉

「身体能力、80%解放」

凜の周りに、様々な姿をした異形が現れる。

〈訓練、開始だ！〉

中心にあった刀が霧化し、次の瞬間には凜の手にあった。

大地を蹴り、近くに居た異形の懷に潜り込む。刀を横に一閃。異形の身体は真っ二つになり、消える。

「ゼブル、双頭剣・逆刃！」

漆黒の刀が、中心に柄があり、両端には刃の向いてる方向が違う剣に変わる。敵の中心に行き、剣を刃の向いてる方向に回す。発生した風が、半径五十メートル以内に居る

異形を切り刻む。

「長刀」

凜の言葉に合わせて武器の形が変わる。3 mを優に超える長刀を両手で持ち、上段に構える。

「一ノ太刀・絶空……」

振り下ろされた刀から発生した斬撃が、前方に居た異形を切り裂く。

「二ノ太刀・斬空破衝！」

振り下ろした体制から、後ろに向けて横に振りぬく。発生した斬撃と衝撃波が、後方に居た異形を消し飛ばした。

「三ノ太刀・霸空絶衝斬！」

下段からの切り上げの勢いで跳躍。上空の異形は全て倒した。残るは地上と地中に居る異形だけ。

「四ノ太刀・霸刃爆碎衝！！」

台地に向けて長刀を振るう。発生した斬撃が、一部の大地を消し去り、遅れて到達した衝撃波が大地を破壊し、砂煙が舞い上がる。これまでの動きは全て、魔法を使っていない。純粹な身体能力のみでの技だ。

「終極・霸王殲滅斬！！！！」

連続で振るわれる長刀。飛び交う斬撃と衝撃波が、世界を切り刻む。

「手応え無さ過ぎるかな。ランクA A Aに上げて」

〈凜、お前がクリア出来たのはA Aまでだろ!!〉

「何時の話してんの？ あれから一年も経ってるんだから、大丈夫だよ」

〈……どうなっても知らないぞ…〉

「大丈夫。ゼブルを残して、逝ったりはしないから。一人で苦しませないために、出来るだけ力を制御するから……そのためには、今出来る限りの事をする。無理矢理にでも、あいつを引きずり出さなきゃ」

〈……：数はさっきの三倍、強さはBからA A Aに、三段階^{ランク}アップでいいな?〉

「うん！」

〈始めるぞ!〉

世界が修復され、さっきの三倍の量の異形が出現する。

長刀を二本の普通の刀に形を変え、異形の群れに突っ込んでいく。下段からの切り上げを強固な身体に受け止められるが、もう一本の刀で突きを放ち、吹き飛ばす。体勢をそのままに、背後に迫っている異形目掛けて、刀を投擲。腕で弾かれるが、その動きによって生じた隙をつき、手元に残った刀を一閃。真っ二つにすることは出来なかったが、傷を付ける事は来た。弾かれた刀がタイミングよく振ってきた。それを手に取り、袈裟に振り下ろす。異形の身体は切り裂かれ、消滅する。

「やっと一体か。かなり長期戦になりそうだね」

〈分かっててやるって言ったんだろ〉

「そうなんだけど、ここまでは思わなかったから…」

苦笑いで返事を返す。異形が一斉に飛び掛ってきているにも関わらず、落ち着いている。

「身体能力100%解放。暗黒共鳴：共鳴率120%！」

黒いオーラが噴き出し、異形を吹き飛ばす。

髪は黒く、肌は先よりも更に白くなり、瞳は底の知れない闇を思わせる漆黒。

「凜！？ その姿は：一体……！??」

「私にも分からないけど、今は考えてる暇はない！」

一体の異形の前に移動し、一本になった刀を振るう。あっさりと斬ることが出来た異形に、少し驚きながらゼブルに話しかける。

「敵のレベルを下げたわけじゃないよね？」

「そんな事してない。お前の力が、極端に上がったんだ」

マジ……—と呟きながらも、迫り来る異形を倒していく。

刀の形が小太刀に変わった。得物を振る速度が、視認出来ないまでに早くなる。

姿勢を前屈みにし、地面すれすれまで腰を落とす。全方位に居る異形の攻撃範囲に入った。刹那、凜の姿が掻き消える。次に凜の姿が元の場所に現れた時、異形の数が半分程消えた。

「この状態なら、アレも使えるよね？」

「可能だろうが、流石にアレは厳しくないか？」

「とにかくやるよ。精神リミット・フルブレイク！」

背中から一対の黒い翼が生え、身体から黒い霧が漏れ出す。今まで抑えていた負の感情を一気に解放した状態は、そう長くは持たない。

風景が凄い勢いで変化する。白い世界はどんどん黒く染まり、黒い世界に飲み込まれた異形は、黒い姿が白くなる。

得物を長刀にし、地面に突き刺す。

残った異形が全方位から迫ってくる。頭上に僅かな隙間を見つけ、跳躍して脱出する。建物で例えると六階あたりの高さで止まり、重力による自由落下を始める。

精神世界であれば重力を0に出来るが、あえてしない。訓練でなければ変えたりするが、訓練時にそれをやっては意味が無いからだ。酸素量は普段生活してる場所よりも少なめにし、重力は二倍。

その環境で凜は、この世界に来る前からやっていた。魔法というモノが無い世界で――

落下する速度はだんだん増し、それに回転を加える。

落下地点にいる異形を無視し、長刀の柄頭に踵落しを決める。大地が砕け、吹き飛んだ白と黒の岩が異形を押し潰す。

地面に刺さっていた長刀は消え、凜の手に普通の長さの刀が握られている。上空に投げ、落ちてきた刀の柄頭を蹴り、一箇所固まっていた異形を消す。

「残りはコイツだけ……」

「さすがに大きすぎたか？」

心配そうな声色で凜に尋ねる。

凜の目の前に居る人型の異形は、親指の第一関節だけで、凜の身長二倍はある。頭は全く見えない。

「大丈夫だよ」

「武器はどうする？」

「6mの長刀二本」

凜の両サイドに得物が出現し、手に取る。

地を蹴り、異形の足に刀を突きつけるが、その頑丈な肉体に弾かれる。しかし、弾かれた勢いを利用して一回転し、峰で思いきり叩く。

「硬いし、でか!!」

「だから大きすぎたか? って聞いただろ」

「まあ、何とかなるけど」

「なるのか?」

「見ててよ」

長刀を二本とも逆手に持ち、目を閉じる。目の前まで迫っている異形の拳を見る事無く、躲す。

「動きはそうでもないね」

「この重力下でその速度を平然と保つ事が出来るお前は異常だ」
「今に始まったことじゃないでしょ」

目を閉じたまま、異形の攻撃を全て躲し、片足を切り落とす。
バランスを崩した異形が手をついた。刹那、両腕が消し飛ぶ。

「目で見るとどうしても硬そうとか、強そうとか思っちゃうでしょ? 目を閉じて、気配で見ると、直に見た時よりその気持ちは半減するんだ」

人によるけどね——と付け加え、異形の頭を斬り落とす。

「それに、私の場合は能力を制御できて無いから、切れ味が良かつ

たり、悪かったりとバラバラ。目を閉じて自分の力に意識をほとんど持っていけば、この程度雑魚だよ」

「最初はてこずってたくせに……」

「余計なこと言わない。さて……出てきてよ」

黒の世界から白髪に褐色の肌という点を除いて、凜と同じ容姿の少女が姿を現す。

「こういう時って、何て言えばいいのかな？」

「久しぶり——でいいんじゃない？」

凜の問いに、少女が答える。

口元が僅かに笑っているが、少女に纏わりついている空気は異常。並みの精神力じゃ立っていることすら出来ない。

「見た目も口調も似てるのに、私の負の塊なんだよね？」

「あなたは正の塊。私達は、どちらが欠けても消滅する存在」

「でも、あなたはそれでも構わないんでしょ？」

「ええ。私はあなたを破滅に導き、外で暴れまわる。一時的だしともね」

「あなたは私で、私はあなた。今の世界では光と闇は永遠。でも……」

「昔は闇は無限で光は有限だった」

「世界を創った、もしくは世界に創られた神は、無限でもあり……」

「有限でもある。この矛盾は覆らない。なぜなら……」

——聖神と呼ばれる光と、邪神と呼ばれる闇の二つが存在するから。

「全ての神が無限なんてありえない」

「神にも死はある。闇でも滅びる時は滅びる」

「世界が生まれる前までの歴史が消滅すれば……」

「そろそろ始めようよ」

「あの時の決着をつける戦いを……」

「勝った方が身体の所有権を得て、負けた方の力の七割を相手に渡す。いいな?」

「うん……」

「では……始め!!」

ゼブルの合図と共に、光と闇が衝突した。

13話（前書き）

グダグダだなゝ（苦笑）

13話

黒と白の刀が衝突し、世界を揺らす。

空間に大きな亀裂が入った。すぐに修復されたが、再び二本の刀が衝突する事で亀裂が入る。

中級神と同等、もしくはそれ以上の力が何度も衝突する。

袈裟、切り上げ、横薙ぎ、逆袈裟、突き——全て同じタイミングで同じ攻撃が繰り返され、両者共に一撃も入らない。

同一人物であるが故に、思考がほぼ100%一致してしまう。だが、決定的に違うのは、一方には正の感情が一切無いこと。一方には正の感情も負の感情もあること。体力の差

——ついさっきまでやってた訓練で、ほとんど半分くらいしか残っていない凜に対し、少女は万全な状態。それどころか、ある方法以外では体力が減ることの無い存在。どう

考えても、凜のほうの方が悪い。

「ふう……………」

深く、静かに息を吐き、目を閉じる。

「動きを止める余裕なんてあるのかな？」

一瞬で凜の懷に潜り込み、刀を横に振るう。一切抵抗する事無く、凜は切られた。だが、少女はある違和感に気が付いた。

「手応えが、ない……………」

そう、手応えが無いのだ。まるで空気を切ったかのように、何も感じられなかった。

「魔力解放…暗黒共鳴…共鳴率150%。

「ねえ…あなたも知ってるでしょ？ 魔装具が、存在する意味」

「世界の破壊。いや、消滅。まるで、元から無かったかのように、完全に消し去る」

「そう…。それと魔装具の本当の力…

「部分魔装！ 両手、両足！」

黒い霧が凜の四肢に纏わり付く。異様な雰囲気放つ凜に少女は身を震わす。それは恐怖からではない。やっと本気を出せることの喜びから、身の震えが止まらないのだ。

黒い霧が消え去る。特に変化が見られるわけではないが、力のほうは確実に変化が見られた。

「絶空！」

放たれた斬撃は空間を切り裂き、少女に迫る。本来は空を切り進む斬撃——と言っても、ビルを軽々と斬ってしまう程なのだが。

「滅しなさい……」

黒い光が、少女の前に収束し、弾ける。弾けた光は斬撃にぶつかり、徐々に消滅させていく。だが、完全に消し去る事は出来ず、ギリギリの所で刀で防いだ。

「虚空双閃牙！」
こくうそうせんが

刀を二回振り、斬撃を飛ばす。それが少女に当たる直前に一瞬で

間合いを詰め、突きを放った。だが、少女はそれを刀一本、片腕で止めた。

「なあんだ。こんなもんなんだ。つまんない」

「誰が、終わりって言った？」

「？」

——技変化、虚空双閃牙・雷！！

刀身と斬撃に紫電が宿る。ゆっくりとその量は増していき、爆ぜる。

「くっ…！」

避けることも出来ずに、直撃を食らった少女が爆煙の中から先に姿を現した。追撃を仕掛けるように、刺突の構えをした凜が爆煙の中から飛び出す。

「碎牙！」

刺突の間合いに入ったところで足を地に付き、半身の体勢から上半身を捻り、刀を突き出す。その攻撃は岩をも容易く砕く獣の牙。

少女はあまりの速さに対応しきれず、左腕を捨てた。鮮血が飛び散るが、それでも勢いは衰えず、骨を砕いて貫通し、腹に突き刺さる寸前で止まる。

「くう……！！」

「余裕を見せるから、こんな事になるんだよ。」

「雷牙！」

腕を貫いたまま、刀身に紫電を纏わせる。体の表面だけではなく、体内にも紫電が流れ、体温が上昇していく。

「いやあああああああああああああああああ!!!」
チエツク
「王手」

少女の体が爆ぜる。体内の水分が沸騰し、肉体が耐え切れなかったためだ。

空間の1割が白に戻る。今は空間の6割が黒、4割が白の状態。

「あゝ、危なかった」

「やっぱり、終わってないよね」

背後には目の前で鮮血を撒き散らして爆発した少女。同じ黒髪をしていて、でも、異常なまでに白い肌。

「リミットブレイク」

「魔装リミット解除。リリース全身魔装……」

互いの身体能力が急激に上昇する。凜の身体中から黒い霧が噴き出し、それが表面に張り付いて頑丈そうな黒と赤で出来た防具を身に纏い、背中からは漆黒の羽が三対生え

た。

黒く、形状の安定しなかった刀は、刃は銀色に鈍く輝き、峰は漆黒、柄は深紅で鏑が無い長刀。

少女のほうには変化が見られない——否、変化はあった。それは、少女が再び姿を現した時の肌の色。

「やっと本気を出せる……っ!?!」

「背後に回っても無駄。全部、見えてる……」

前傾姿勢になり、右手を後ろに回して少女の首裏に長刀の刃を当てる。

「何……!?!」

「今の私の目は、全てのモノの動いた跡が五秒間だけ、光って見えるの」

厄介な能力だが、欠点がある。それは、どこにいるか知られる前に攻撃すること。でも、今の凜にはそれすら通用しない。なぜなら——今の発言で説明したのはほんの一部

だけだから。

「終わりよ」

右に半回転し、首を切り落とす。一瞬、大量に血が飛び散るが、すぐに収まる。

「はぁ…私の負けね。私の力、いらないんじゃないの?」

「暴走した魔装具を止めるには、貴女の力も必要。ま、本当は一つの力が二つに別れたただけだけど。それじゃ、返してもらうよ。お母さんから受け継いだ力の七割を」

「約束したものはしょうがないわよね。次は奪わせてもらうから」

少女の身体が光の粒子に変わり、凜の体内に入っていく。完全に少女が消えた時、残った凜とゼブルは同じような事を同時に呟いた。

「七割って約束だったのに、全部返してくれるなんて……」

「七割って約束だったのに、全部返すとは……」

精神世界は真っ白になり、魔装状態なのに、精神的疲労がなくなつた。

（今回だけ特別。今関わってる事件が解決したら、三割返してもらうから）

少女の声が頭に直接響く。凜はそれに返答をせず、元の世界に戻つた。

フェイトside

目が覚めたら、私はベッドの中に居た。

いつの間に寝ちゃったんだろう。思い出せない。

そんなことよりも、凜の姿が見当たらない。最近、よく倒れるから心配で探しに行こうと思い、ベッドを抜けると――

「おはよう、フェイト」

黒髪の少女が部屋に入ってきて、私に挨拶をしてきた。

何で私の名前を知ってるの？ 私はあなたに今、初めて会ったんだよ。

「そんな警戒しないで。私は貴女に伝える事があって来たの」
「私に……？」

「うん。単刀直入に言うわね。月影凜と関わるのは止めなさい。大切なものを全て、失うことになる」

どういう事？ 訳が分からない。何で、この子にそんな事言われなきゃならないの？ 私の事も、凜の事も知らないくせに！

「バルディッシュ」

バルディッシュを起動して、バリアジャケットに身を包み、電気を身に纏う。

今から使う技は凜に教えてもらったもの。

私は魔力変換資質の電気を身に纏って戦ったことはなかった。凜が言うには、そうしないと今より速くなるのは難しいらしい。それと、電気を身に纏うのにはもう一つ理由

がある。それは、身体能力の上昇。全身に電気を纏う事によって、神経が筋肉の動きを脳に伝える伝達速度をMAXの状態に出来るみたい。

その状態で放つのは、空気を切り裂く雷の刃。

「雷空一閃！！」

床を蹴って今までで一番速い速度で懐に潜り込み、腰溜めに抜刀の構えで持っていた斧形態のバルディッシュを振り抜く。サイズフォームじゃ無い理由は、この状態のほ

うが抜刀しやすいから。

全魔力を乗せた一撃は――

「部屋ん中でそんな危ない魔法使っちゃダメだよ、フェイト」

いつの間にか帰ってきていた凜に、片手で受け止められていた。受け止めた手の指先から地面に血が落ちて、絨毯に吸収される。私、無意識で殺傷設定に……

「あ……ああ……！」

「落ち着いて……大丈夫だから」

凜が、怪我をしてないほうの腕で私を抱き寄せて、背中を優しく叩いてくる。大人が子どもをあやすみたいに。

「出て行け……フェイトに暫く近づくな」

「分かった。じゃあね」

少女は、その場から消えた。魔力は感じられなかったから、魔法は使っていないと思う。それだったら、どうやって？

「リテイス、さっきの女の解析を」

『すでに終わっています。彼女は――』

声が聞こえない。思念通話に切り替えられたから。気になって視線をつなげようとしたけど無理だった。

「ねえ、あの子の事、分かったの？」

「うーん、今は教えられないな」

「何で？」

「悪いけど、暫く待ってて。いずれ、俺の口からじゃなく、本人から聞く事になるから」

どう言う事？　もしかして、近いうちまた来るの？

気になって会いたいつて気持ちと、恐怖から会いたくないって気持ちがぶつかり合ってる。

その時、さっき私がやった失敗を思い出して、凜の手を見る。怪我はもう、治ってた。

「7時17分か。すぐに朝食作るね」

その言葉に、私は頷いた。

凜side

リテイスから彼女の解析結果を聞いて、半分、予想していた内用だった。

（彼女は――人間では有りません。妖怪と呼ばれる存在^{モノ}です。他の力も感じますが、それが何なのかは……）

私が神と『妖怪』のハーフなら、彼女は『悪魔』と妖怪のハーフ。悪魔の力は隠してたようだけど、私には隠し通せない。魔装具は――悪魔から生まれたものだから。ゼブ

ルが彼女が悪魔であることを教えてくれた。でも、別の力も感じると言ってたけど、リテイスの解析でハッキリした。

低級悪魔は天使から下級神でも力の低い存在と同じレベルの力を持ち、中級悪魔は下級神でも特に強い方から中級神と同レベルの力

を、上級悪魔は上級神と渡り合えるほど

だ。だが、最高神ゼウスと渡り合える悪魔^{モノ}は存在しない。

神と悪魔は仲が悪く、争い事が絶えなかった。争いのたびに多くの悪魔と天使、神が死に、ゼウスの力によって争いが終結する。その繰り返し。悪魔達はゼウスに勝った

めに、サタンを生み出した。だが、それでもゼウスに勝つ事は出来なかった。力は互角だったが、経験の差でいつもゼウスが勝ち、勢いに乗った他の神々に悪魔達は次々と倒

されていき、負けた。

どうしても神に勝ちたくて作ったのが魔装具。だが、自らの力の一端である魔装具が、制御し切れなかった。暴走した力は敵味方関係なく、殺していった。神や天使の力は

吸収され、悪魔たちの力はそれ以上の力で押し返される。結局、制御できた悪魔は五体しか居らず、その中に、サタンは入っていない。ってか、力を吸収出来るんならその前の戦い全てに勝てただろ。

初めてゼブルからこの説明を聞いた時は本気でツツコンだな。

あの様子だと、彼女は完全に制御出来てるみたい。私なんて、全然なのに……。ま、そんな事はどうでもいい。彼女はおそらくけど、敵じゃない。でも、味方でもない、

中立の存在。

これ以上は考えても仕方ないかな。思考を切り替えて、いつも通りにしなくちゃ。

「ご飯出来たよ」

「はい」

フェイトも来て食卓に着いて朝食を摂る。朝食はスクランブルエッグとサラダにトースト一枚ずつ。の、つもりだったけど、フェイトも私もそんなに食べるわけじゃない。

トースト一枚を半分こして好みでマーガリンやジャムを塗って食べる。

「アルフ、帰ってこないね」

「だなく。リティスの予想だけど、フェイトに内緒で、ジュエルシードを全て手に入れるために単独行動とってるんじゃない」

フェイトは少し疑ってはいるものの、問い詰めても何か分かるわけではなく、諦めた。

私も本当に知らないから。知ってたら教えて上げられるんだけど。本人に口止めされない限り。

「凜、久しぶりに模擬戦しよ」

「いいよ。片付け終わるまで待ってね」

食器を流しに持って行って洗う。それが終わったらテーブルの上を拭いて、アルフが何時帰ってきてても、私達の居場所が分かるようにメモを残す。

フェイト達の使ってる文字と、私達の使ってる文字は違うから、書くのはフェイトに任せた。

「フェイト、？まって」

「え？」

「いいから」

「わ、分かった」

フェイトをおんぶして目的の場所まで行く。あそこだったら、いい練習になるから。

凜side out

二人がやってきたのは神社の裏手にある山。凜がこの場所を選んだ理由は、妖怪の住まう山だから。しかし、普段は大人しくしている。理由は、暴れていたら神社に住んで

る妖狐と蒼夜にフルボッコされたから。底知れぬ靈力で妖怪を威圧し、妖狐と一緒に殺さない程度に技を使う。凜がジュエルシード探索の時についでに立ち寄って、妖怪に聞

いて回ったところ、あの時の少年は鬼神の様だったそうだ。

凜の妖力は大妖怪を圧倒するほどある。前述の蒼夜の事を聞こうとした時に襲われたため、抑えていた妖力を解放して力の差をハッキリとさせたところ、大妖怪を越えると

言われた。

「ふう……妖力解放」

凜のお母さんは狐の妖怪だった。

様々な幻術を使い、惑わして人も妖怪も撃退する。でも、それは力の一端に過ぎなかった。最強の妖術は、幻を実体化させる『幻魔

召還』。

妖力で火や水、土、風、氷、雷を起こす事は出来る。だが、幻魔召還は空想上の生物を召還できる。オリジナルの生物も。

凜の姉は妖力が少なく、また、神力もない。

だが、凜は母親ほどではないが、かなりの量の妖力を内包している。幻魔召還も難なく行えるほど。

「フェイト、これから、ありえない光景を見ると思う」

「ありえない光景？」

少し離れているフェイトにも分かるように頷き、言葉を紡ぐ。

「魔法以外の力。『幻魔召還・炎龍―カバラ』」

凜の背後で炎が上がる。その中から紅蓮の龍が姿を現した。

フェイトは魔力を感じられなかったのに、召還魔法の真似事をした凜に驚いた。驚いた要員はもう一つ。龍だ。龍は魔法の知られている世界でも珍しい幻想種。その力は弱

いものでは魔導師ランクS、強いものではSSSの局員ですら苦戦する。

「こいつは幻を具現化した存在。力はフェイトと同じくらいだから、気を緩めなければ倒せるだろ」

「魔法以外の力って何？」

「始める前に教えとくか。この世界には複数の力があるんだ。一つは霊力。これはほとんどの生物が持っている力。次に妖力。これは妖怪と呼ばれる存在と、極一部の人間が

稀に持っている力。人間の場合は力に飲まれると妖怪化する。次に

神力。これは神と呼ばれる存在と天使、あとは霊力を持たない一部の存在が稀に持って生まれる。最後に魔

力。これもほとんどの人間が持つてるな。ま、地球じゃ稀だけど」

「ちょっと待って、凜。よく分からないよ」

「分からなくていいさ。ただ、この龍が妖術を使って具現化された存在って思ってもらえれば」

フェイトは未だに混乱しているが、時間は無い。龍を具現化している凜は、常に妖力を消費している。そのため、体力の減少が激しい。

「フェイト、思考を切り替えろ。始めるぞ」

「う、うん！」

バルディッシュを起動してバリアジャケットに身を包む。

それを合図に、龍が火炎を吐く。フェイトは紫電を纏い、高速移動魔法を使用して躲す。

「フェイトの電気は魔力の塊を変化させてるもの。フェイトもなのはみたいに感覚で魔法が使えれば——」

フェイトの移動速度が上がる。魔力の半分を移動補助に回し始めたからだ。

紫電が弾け、軌跡を残しながら龍の背に回り込む。

「手の平に空気中の魔力をかき集めて収束近距離砲が放てる。ま、これは身体強化してやっと、一発放てるくらいだけど」

凜の読みではそうなるはずだった。だが、フェイトの考えは違う。

手の平に魔力を集めるまでは同じ。そこから形を変え、別の魔法を放つ。

「ライジング・ランサー！」

膨大な力を小さな槍の形で押さえ込む事で密度を濃くし、破壊力が増す。ただ、術者に相当な負担が掛かる。これも、凜の考えと同様、身体強化して一発しか放てない。さらに、反動が大きすぎて収束砲よりも隙が大きくなる。

「カバラ！」

凜の声に反応し、尻尾を動かしてフェイトを薙ぎ払おうとする。だが、それよりも前に、フェイトがもう一つの魔法を構築していた。

「フォトンランサー！」

放たれた魔法が尻尾を弾き返す。

この世界は、全ての力が原作より強力になっている。それは魔装具の介入による現象。そのため、原作にはないリンカーコア以外の魔力を内包する器が存在する。だが、その事は管理局も知らない。

管理世界の魔法は科学に近いものだが、まったく自然の現象に干渉していないわけではない。凜の使用する魔法は、原作と全く同じなら違和感があるが、さまざまな偶然が重なり、その力も当たり前にだった。

今のフェイトの魔法は、リンカーコアに内包された魔力と、心臓に内包された魔力をフルに活用し、更には、デバイスの補助もある。心臓に内包された魔力はリンカーコアに内包された魔力とほぼ同等。それは、他の人も例外を除いては同じ。

これに気付いたのはゼブルの――魔装具の魔力増幅機能のお蔭だ

が。

「ほんと、フェイトの魔力が本人が気付いてる分の倍あるってのは、驚いたな。そのことを教えたはいいけど、すぐには使いこなせないよね」

槍の形がぶれる。魔力が切れ始めた。

フェイトの手の中にある状態で暴発すれば、命の危険に関わる。

「フェイト！　すぐに放て！」

言われなくてもやりたいところだが、抑え込むのに意識を向けないと放つ前に暴発する。だが、放とうと意識を少しでも別の場所にやってしまうと、それもまた放つ前に暴発してしまう。

「ちっ：ゼブル、干渉するぞ！」

（かなり危険だぞ）

「承知の上だ」

凜の手から黒い魔力が噴き出す。手をフェイトに向けて魔力を放出し、槍に纏わせた。

「フェイト、俺が抑え込むから放て。炎龍は勝手に動くぞ」

「分かった！」

槍の形が安定し出した。槍の柄頭に小さなスフィアを形成し、爆発させた。爆風の勢いを利用して槍を放ち、同時に自身は後方へ飛ぶ。攻撃の反動を少しでも減らし、次の行動にいち早く移れるようにだ。

「上出来だな。後は休んでろ」

「え？」

「自立行動に切り替えたから、もう干渉は出来ない。力で捻じ伏せる！」

凜の身体から視認出来るほど、密度の濃い魔力が溢れる。魔装具の力を解放した時の黒い魔力ではない。通常、魔力を可視化出来るのは魔法の発動時に溢れる魔力光のみ。魔力が可視化出来る場合は、激化状態か魔力を制御するのが上手な人だけ。

凜の場合は、普段は魔装具の暴走を抑え込むのに、常に意識の一部を向けていたため、魔法の発動や戦闘訓練は片手間でやっていた（訓練よりも力を抑え込むほうが大変だったから）。今は力を全て貫っているため、暴走する事も無い。全意識を魔力制御に向けたただけで、いつもとかなり違う。

「主人の命には従うものだよね？」

——グラビティ・ゼロ。

龍の羽が付け根から外れる。否、消し飛んだ。

さっきの魔法はその名の通り、一定空間の重力をゼロにする魔法。重力がゼロになるとどうなるか？地球上で働いている重力は圧力を生む。圧力は生物が形を維持するのに必要な力。重力がなくなればその力がなくなるため、外に空気や水分が逃げようとする。そうなれば身体が膨張し、破裂する。

さっきの現象はこれを利用したものだ。

「飛ばれると厄介だからね」

「グオオオオオオオオオオオオツオオオオオ!!!」

炎龍の口から火炎が放たれる。だが、攻撃が届く前に消えた。再び重力をゼロにし、空気をなくした事で起こった現象。

炎龍も、自信のある火炎を避けるならまだしも、いとも容易く破られた事に驚きを隠せなかった。

「リテイス！」

『Stand by ready, set up』

久しぶりの起動。バリアジャケットに身を包み、2ndモードの極雷剣を両手で持ち、腰溜めに構える。

「力はかなり強く設定したから、このくらいでもしないとね」

凜の身体を包み込むほどの紫電が弾ける。

「妖術・群青雷光斬」

冷気を纏った紫電の弾ける剣は群青色に輝き、光の軌跡を残しながら炎龍の目の前まで移動し、剣を振り抜いた。

冷氣と紫電の斬撃は炎龍の身体を切り裂き、凍りつかせ、紫電が凍りついた部分を砕いていく。

「ふう……今日は疲れたから帰って休もつか」

「う、うん」

デバイスを待機状態にし、フェイトの方に振り向く。

氷が反射した陽の光を背に立つ凜の姿が、フェイトには美しく、また、儚く見えた。

13話（後書き）

くおまけく

「レフイトさまく、入りますよく。レフイト様？」

返事が無いことが少し不思議だったが、深く考えずに中に入る。
相変わらず部屋の中は書類の山が出来ていた。

天井にはモニターが展開され、そこには凜と炎龍が戦ってる姿が映っている。

「レフイト様、どうしたんですか？」

「いや、とんでもない者に魔装具の件を頼んでしまったと思ってな」
「はい？」

レフイトの発言に、彼の部下である神は付いていけない。

「お前は重力に干渉できるか？」

「いえ、出来ません」

「だろうな」

「??？」

何が言いたいのか全く分からない。首を傾げてモニターを眺める。

「凜は、魔法で重力を操った」

「え?!」

「信じられんだろ。神でも一部のものにしか出来ない事を、神の力を受け継がなかった半妖がやった。規格外にも程がある」

言葉を失う神。それほどまでに、衝撃的な事実だった。

「あ、レフィット様、追加の書類5万枚です」

「いい加減自分で仕事させろおおおおお！！！！！！」

くおわりく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9878r/>

魔法少女リリカルなのは～神の気まぐれによる不幸な転生者達～

2011年11月15日13時27分発行